

平成29年（西暦2017年）08月

瞑想録（その21）

滝沢 無縛（たきざわ むばく）

この一連の瞑想録の主題は、「素朴な疑問と意外な気づき」です。誰もが当たり前だと思っていることを懷疑しおよそ人が気付かないことに気づこうという、自己流哲学の瞑想集です。ちなみにこれは科学でも学問でもありません。強いて分類すれば随筆です。科学が万能だとも思っていませんし、科学でない最大のポイントはここにあまたの思い付きについて証明を一切していないことです。私は、世の中には実は現状よりもずっと面白くて自由な物があるはずで、現代人はまだ十分にその視野を広げていないと信じています。

なお内容は気づいた順に並んでいるので、一見ランダムで読みにくいかもしれません。またこの論集の一連は下記のサイトに全部収容してあります。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

<https://sites.google.com/site/mubaku133/>

さらにこの一連の論集は下記のブログの主要記事を集めたものです。

<http://blogs.yahoo.co.jp/oseh13>

2017. 06. 27

1、ひろゆき氏の「2ちゃんを捨てた理由」を読んだ

社会問題にもなった、匿名掲示板の巨大な集合体である「2ちゃんねる」。これを作った「ひろゆき」こと西村博之氏の、「私が2チャンネルを捨てた理由」（MSワードのエラ一回避のためにカタカナ表記、以下「2ちゃん」）を読んだ。

読んだ理由はストレートに、①なぜ2ちゃんを他人に譲渡したかと、②これまでの民事訴訟約40件の確定判決の総額4億円の賠償をどうするのか、に興味があったからだ。だがこの本においてこの件に係る内容は全体の高々1割程度で、残りは全部ひろゆき氏のネットコンテンツビジネス一般に対する主義主張と将来の見通しについての開陳だった。

2ちゃんを譲渡した理由についてひろゆき氏は、「一旦2ちゃんが認知されてしまうとこれはもう現実的には無数の匿名ユーザーの自主管理になってしまい、名目上の管理人の仕事は凡庸なものだけになってしまった」からだと説明している。

私はこの主張は疑わないものの、ネットの事情通によるとどうも、「民事判決に係る差し押さえを避けるために海外のダミー会社に形式上と譲渡した」というのが本音だと言う。これ以上は推察になってしまうが、そう言う面もありなのかなと思った。

ひろゆき氏はその後ニコニコ動画を運営したが、これも現状（本を書いた当時）は多少の赤字にしてあると言う。そして赤字でも運営する理由として、「赤字か黒字かよりも、ネットでどれだけ世界や常識を変えられるかの方がだいご味だ」と主張している。

私も再びこの主張は疑わないが、他方で「ニコ動を差し押さえられたくない」という思惑もあるのではないかとも思った。さもなければ今回のこのような本をわざわざ書いて、アリバイ的な言い訳をする必要などないはずだろう。

また民事の賠償金については、「判決はその通りだがまだ裁判所の強制差し押さえは1件も来ていないし、このまま時効になるだろう」と予測している。そしてその理由として、「無数の2ちゃんユーザーに逆恨みされてまで強制執行を要求する人はいないだろう」と、さらに推測している。

これも私は再々度信じるが、もう少し事実在即して順序立てて言うと次のようになるだろう。ひろゆき氏は、①当初は軽い気持ちで掲示板の集合体である2ちゃんを作った。②作ってみたら匿名性とマニア趣味が大ヒットして予想をはるかに超える大盛況になった。

③この掲示板は相互方式でなく一方的な書き込みであるために「被害者」は削除要求ができず書かれっぱなしになりそれがますます書き込みマニアを増長させ内容が社会問題になった。④「被害者」は仕方なく管理人を訴えて裁判にも勝訴したがここで強制差し押さえを要求すると自分が悪者として有名になるだけという「すくみ状態」が形成されてしまっているために泣き寝入りしかない。⑤ひろゆき氏もこのからくりについて安堵している、というのが真実ではないか。

さらに「2ちゃん自体あるいはこのブームをきっかけとして裏サイトや援交ビジネスや陰湿なネットいじめが広がったのではないか」と言う批評についてひろゆき氏は、「い

じめとかは従来から口や紙でやられていたのがネットに移行しただけだ」と主張している。

4回目になるがこの主張も私は信じる。「2ちゃん以前からいじめや自殺はあった」という主張自体はその通りだろうが、2ちゃん等がこれらを助長させたという事実は誰の目にも明らかであって、単に「証拠となる統計の取りようがないことをひろゆき氏も知っている」と言うことだけだと思う。

またひろゆき氏は、「いたずらに2ちゃんやネットを批判するよりも、現にある新発明を柔軟に有効利用していくという姿勢の方がよほど建設的ではないか」と主張している。再再度この主張も正しいと思うが、これを言ったのがひろゆき氏だと、「人々の視点を意図的に逸らして自分の罪科を隠蔽させようと誘導している」ように見えてしまう。

ネット環境一般に関しては特にスマホのガラパゴス化に関して、「技術革新自体は良いことだが、ユーザーがついてこられないほど進化が早すぎるとか要らない機能ばかりでバカ高いのは、ビジネスとしては失敗だった」としている。

「過ぎたるは及ばざるがごとしで、伝道師不足だった」という訳だ。日本人の勤勉さや器用さが裏目に出たという見方である。まあこれも再再度そうだろうが、だったら今自動車が電機産業のように中韓台に売り負けずに例外的に世界市場を席卷している理由は、「自動車が所詮ドンガラ物であって重厚長大だから、人々がちょうどついて行ける程度の鈍い進歩だからだ」と言うことだろうか。

また同氏のビジネス観である、「株式公開したら頭が株主の方に向いて常に儲け第一主義になりせっかくの金の卵をつぶしてしまう」、これには賛成だ。ただネットと言ってもテレビほどでないもののタダではできない。その必要経費を、①一般からの視聴料で取るのかあるいは、②広告費で取るかどちらを選ぶのか。種類は違うけれど、いずれもコンテンツに対する一種の縛りにはなってくるだろう。

本の最後に、TV会社の某有名ディレクターとの対談がある。その結論は、①ネット動画の色々ある中での一番の強みは国際性だ、②既存のTV会社の「ネットもすぐにTV番組程儲けろ」的な圧力は金の卵つぶしになるだろう、③ネット動画で「万人受けを」は新規ツールの存在理由を否定することになる、の3つだ。

ひろゆき氏の主張で全体的に感じたことは、彼の常識と信念が私のような平均的な凡人とは全く違うということだ。どう違うかは言葉ではなかなか表現できないが、まず

彼には社会正義の概念がない。「現実と現状こそが正義だ」と言うような感じだ。従って「人々が喜ぶことをやって流行らせた者が勝ちだ」と言うことになる。良く言えば前向きで楽観的である。

ところが性格は結構悲観的で、やるべきことの選別を「消去法でなお残ったもの」と言う方法でやっている。但し常識が違う分だけ残るものも違うのだ。だから2ちゃんとはたまたま上手く行ったが、次はどうか分からない。いずれにしてもサラリーマンには向かない性格だ。そして元々こういう性格だったのが、2ちゃんとの付き合いでますます増幅されたと言う感じである。

努力は嫌いだし確かに努力に無縁な人だ。信念があるのかないのかも分からない、つかみどころがない、もしかしたら本人すら分かっていないのではないか。スライムみたいになんか形にでもなれちゃう感じだ。ただ頭の良さは感じなかった。

思うにこれは新人類に共通な態様であって、単に年寄の私が没入できないだけだ。結局この人の心象や方針をうまく説明するには、日本語の方が変わらないとだめなのだ。そしてその「日本語変われ」感はホリエモン以上だ。一步違えばホームレスをしていてひろゆき氏本人もそれが嫌ではないというか、逆に隠れたホームレスに実は「第2のひろゆき氏」が居るとすら思う。

ネットが既存の常識に風穴を開けて頑固ジジイの説教が無意味になる、あるいは時代の停滞や暗黒化を事前防止する、そういう意味ではなかなか余人にもって代えがたい人物だと思った。

2、教科書の変遷

先日地元の図書館で「教科書の展示」をやっていたので、覗いてみた。一言で教科書と言っても小中高それぞれに違い学年も違い、科目も理系文系芸術系と色々で、さらに正の教科書もあれば副読本的な本もある。そんな全部で数百冊に及ぼうという中で私が覗いたのは、高校の教科書である。

先ず美術の教科書を一瞥して驚いた。私が学生だった〇十年前と比べて雲泥の差なのだ。私が教育を受けたのは終戦から既に四半世紀も経とうというところだったが、このころの美術の教科書は今から思うと、「これでは戦前の教科書ではないか」と疑うようなものだった。

紹介されている作品も日本人なら黒田清輝を筆頭とした明治期の評価が定まったものの、海外物でもルノワールとかゴッホとかやはり評価が定まったもので、一番新しくてもピカソだった。授業も毎回級友を順繰りにモデルにしたデッサンやせいぜい版画とかで、つまらなかった。「基礎は重要」これは否定しないが、面白さが全く考慮されていないところで基礎だけやっても、ほとんどだれも以後に専攻しないから結局無駄ことなのだ。

ところが今の教科書はそういう古典もあるにせよ、まず現代美術の潮流から説き起している。巻頭の画像はいきなりインスタレーションやデジタル画像だ。現代の有名無名の作家の作品や抽象絵画を「視点」と言う立場から色々見せる上に、看板や装丁のような工業制作や商業制作、更には世界各地の民族芸術まで幅広く紹介している。

また古典芸術にしても「なんでもダビンチ」と言うことでなく、ヒエロニムス・ボスのような「外道物」までも混せて広く紹介し、将来美術を志すにあたってどれだけ間口が広いかを教えるように作られている。その多様性と先進性に驚いた次第である。

「教育も進んだものだ」と感心しつつ続いて、美術と対極にある数学の教科書を手に取ってみた。そして再び驚いた。こちらは全く変わっていないで、古色蒼然そのものである。強いて言えば、かつては高校数学の最終目標であった複素数、微積分、三角指数対数関数等が、何気に目標と言うよりは「特殊なオタク向けの付録」のようにおまけ的に置かれていたことだ。

確かにこれらの数学は変にマニアックで分かりづらい上に、ほとんどの人が一生使わない。仮に工学部だとしても理論より計算機シミュレーションの方が重要な時代だから、本当に要らないのだ。だがそうやってしまっただけは身も蓋もない。これはもしかしたら「ゆとり教育」の名残だろうか。

数理科学の名誉のために断っておくと、近年の数理科学に進歩がないわけではない。例えば素粒子論関係の数学である、ラングランズ予想とかカラビ・ヤウ多様体回りは大いに進歩している。だがこれらはいずれも高度すぎる上に、これらが進歩したからと言って特に基礎数学を変える種類のものではない。

まあ確かに最近の芸術系の進歩は長足であるが、教科書がこれらの潮流を直ちに取っ入れていているという「当たり前」が、私には驚きであった。それではと言うことで併せてやはり芸術系である音楽の教科書を見てみると、こちらも考えられないほどの大進歩が見て取れる。

私のころは音楽の教科書と言うと、西洋古典音楽と文部省唱歌くらいしか載ってなくて、授業も歌うか笛を吹くくらいだった。ここでも地味な基礎のみだったのだ。ところが今の教科書は、世界中のあらゆる楽曲を網羅して俯瞰させようという傾向で、海外の民俗音楽もあれば日本古来の浄瑠璃や平家物語の音楽もある。

特に驚いたのは主要5か国語の歌が一通りあって、音楽を通して高校生の内に第二外国語にまで触れられる形になっていることだ。最近の映画音楽の紹介もあり、またギターの弾き方やコードによる作曲の仕方も説明してある。噂によると初音ミクが載っている教科書まであるそうだ。

さらにそれではと言う訳で、芸術と数学のある意味中間にあたる、世界史と現代文の教科書を覗いてみた。するとこれらの分野でも、できる限りの最先端を載せる努力をしていた。現代国語も昔は基本的に夏目漱石と芥川龍之介、新しくても当時すでに死んでいた小林秀雄とかだった。だが今の教科書は茂木健一郎とか村田沙耶香とか今現役の人たちの、善行と関係のないある意味毒を含んだ作品が普通に載っている。

世界史では昔の教科書は宗教改革に変に詳しくて、あたかも戦勝国の欧米の歴史書の翻訳と言う感じだった。ところが今の教科書はアジアもアラビアもアフリカも均等に載せてある。その上に歴史学は過去を振り返る教科であるにもかかわらず、世界平和や世界のあるべき未来について考えさせるように組まれている。

一言で言うと私のころの学問とはあたかも華道や茶道のように、現実離れした習い事をする「学芸」であった。今何が流行っているかとかこれから必要なスキルは何かといった問題に対して、ひたすら無関心を気取っていた。しかも「無関心だからこそ学問だ」と、居直っている風すらあった。だから生徒たちは影で、「荒城の月なんてつまらないから郷ひろみでもやれよ」とブーブー言っていたし、私もそれが不良だとか不従順だとか一切思わなかった。まあ一種の諦観である。

ところが腰の重い教育業界も、最近のICTを先導役とした世の中の情報取得手段の格段の進歩や、「世界の中の日本」と言う立場の飛躍的な重要性を目の当たりにして、「乙に構えていると日本だけが後れを取ると」という意識がそれなりに浸透してきたようだ。昨日今日の短期的な潮流に阿りすぎるのもまずいだろうが、私は「日本の教育もやっと本来の役割を取り戻した」と、これらの態度を評価している。

この観点からは、それでも「100年1日」の如き鉄壁不変の数学と言う妖怪に、返って

素朴な疑問を感じた次第だ。

3、気づきと統一原理

人の気づきにも色々ある。事物の細かい面に気づいたり、より一般的な面に気づいたり、他のものとの類似に気づいたり等である。

ものの視点をアナログとデジタルに分けると、デジタルは数字とかノット(結び目)とかで、1から始まって段々と上に積み上げていく。バベルの塔を築くようなものだ。他方でアナログは逆に先ず全体観を得て、必要ならば要素に小分けしていく。つまりデジタルは「下から上へ」、アナログは「上から下へ」が基本だ。

ところでデジタルの典型である科学的手続きは分析、つまり分解を専らとする。これは逆ではないか。どこがおかしいのだろう。答えると、デジタルの基本はたしかに積み上げつまり「下から上へ」なのだが、世の中の現物は通常既に組み上げられた状態にある。だからその組み上げがどういう形かを知るには、下向きに分解するしかない。

そもそもデジタルで一番重要なことは、単に分解するだけでなくそこに一般則を見出すことである。一般則は極めて広い世界を概観する道具であって、これは積み上げの極致であり、もしかしたら無限に手が届くほどかもしれない。ということは、デジタルは実は積み上げのみではなくて、「分解と総合」と言う真逆の2方向を同時に有しているのだろうか。

もっともアナログだって、単純に「上から下へ」のみではない。もちろん基本は分解だ。それはアナログの典型である神話の世界が、「混沌から始まって段々と分離されて行って形が出来上がっていく」と言う経路が典型であることから見える。キャベツ1つを取っても最初は全体観だが、更に色とかつやとか大きさを分解して見てから総合判断として購入を決断する。

だがアナログにだって総合的抽象的手法はある。先日安野光雅画伯の展覧会に行ったら画伯の描いた三国志と平家物語の画集が並んで展示されていた。そして私はこの2つの長編に、共通の性質があることに気付いた。つまり友情とか正義とか滅私奉公とか武勇とか心の褓とか盛者必衰等だ。こういう気づきはより抽象的だから、統一原理を見出す方向だ。

と言うことはデジタル対アナログと言ってもどちらも同方向の気づきがあって、実際は対極的と言うよりは大きく変わらないのではないかなんて思ってくる。確かに「現実を見極める」という目的が同じならば、そこに適用される手法がデジタルだろうがアナログだろうが、似た方向に行くことにはなるだろう。

ここがデジタルとアナログの別の、ややこしくて混同するところだ。ただ根本思想はかなり異なる。第1にデジタルには「分解すればいつかモナド(単子)に行き着く」と言う基本信仰がある。分解しければ1の積み上げだと分かるという信仰だ。それに対してアナログでは「いつかモナドに行き着く」ことはなくて、やりたければ「どこまで細分しても分解しきれない」という見方になる。

第2にデジタルの統一原理は絶対かつ完璧であって、例外はない。加えてモナドから統一原理に至る時点で、新たな情報の追加はない。言わば機械的にできてしまう。これに対してアナログでは「全体は部分の単純和以上である」が基本であるので、「分解すると共通要素のような情報が零れ落ちる」ことになる。

つまり積み上げあるいは分解したのちの現物復帰は「単なる足し算」ではなくて、それら要素から見えてくる新たな横断的追加情報が必ずあることになる。それだからこそ葦編三絶で、何度も読んで「総合」に気付くことが重要である。現世の現物に完全一般原理を要求する方が、むしろ荒唐無稽だろう。

今三国志と平家物語の共通項を一般則の例として挙げたが、これらは両者に完全に同一の形で当てはまるのではない。その法則はむしろ「ほぼこういう所」という感じの蓋然法則であって、細かいところを言えばはみ出ている部分も抜けている部分もあったりする。それにもかかわらず両者を抽象することにより、もっと上位の「人の思い」のようなものが抽出される。この「人の思い」が、総合による新規要素である。

学問でも実は遺伝子解析とか素粒子論とか、今華やかな学問はデジタル型であるが、昔の学問であった博物学とかあるいは学問以前の占いとかは全体観を大切に必要部分だけ光を当ててみるという意味でアナログ型である。アナログ型の方が人の慣性に自然であるが、病気治療とか兵器製造とか重化学工業と言った現代のご利益は、ほとんどがデジタル型である。

情報学でも旧来のチューリングマシン的な情報理論はデジタル情報のみを抽出しているが、最近の情報学は感性や芸術に至るまで、無体の価値をも評価しようという考

え方になっている。情報が最近になってやっとアナログ的視点を回復して、本来のバランスの取れたところに復帰しようということで、これは好ましい方向である。

今述べたように近年の現世ご利益のほとんどはデジタル思考の成果であるが、そろそろ人類もアナログ精神も取り戻して精神的バランスつまり均整の取れた人間性を回復すべきだと思う。現世利益だけが利益ではないしこれからのご利益もすべてデジタルからと決まっているわけではない。

なおデジタル精神においては矛盾とは敗北終了だが、アナログ精神からは矛盾はしばしば悟りである。

4、博物学の復権

最近では遺伝子配列分析とか素粒子論とか半導体と言った、顕微鏡的なツールを使ってひたすら細分し分解する方向に探りを入れて、見えていないところを掘り出してみようとする種類の科学技術が興隆を極めている。あたかも「根本要素を単離できなければ学問や研究ではない」とでも言われそうな、雰囲気がある。

そんな時代的潮流にありながらなぜか最近、もう終わった学問あるいは1世紀前の学問スタイルと言われ、頭の悪い人や趣味人の手慰みと思われていたマクロ的な手法、いわば博物学的手法が再び息を吹き返しているように見える。

最近いくつかの大学の博物館を訪問してみたが、展示品には電子デバイスとか原子間力顕微鏡と言ったミクロで最先端なものよりも、絶滅した獣のはく製とか人間国宝が作った陶磁器とか、そう言った「バルキーな」ものが目立っていた。

もちろんそういう、①等身大の品の方が展示しやすく見やすいとか、②博物館は一種考古館のようなもので昔からの展示が漫然となされているとか、③微細な物はショーになりにくい、と言った要因もあるだろう。だが発掘品の特別展示とかOB陶芸家の作品の常設とかは私の知る限り、一昔前には一旦展示されなかったものの復活である。

もちろんそんな一昔前にも、バルキーな研究は細々とはあった。例えば、①風力発電機の実出力評価とか、②月面探査車両の性能評価とかだ。ただこれらは工学部でありながら入試に微積分もないようないわゆるB級大学の、学生を押し出し卒業させるための苦肉の策として存在していた感があった。

それが最近では傾向が違ってきて、「マクロな博物学こそが学問の原点だ」と居直りではなくまじめに主張するような研究が結構見えている。典型的なのは近畿大学のマグロの養殖だ。まずこれ自体がマグロの生活環境をいかにして再現するかと言う、マクロの権化のような研究である。ちなみに次の狙いはウナギだそうだ。

だが同大学はマグロ養殖の成功を軸に、今後はマグロをキーワードに流通からアンテナ店舗展開まで文系諸学科も総動員して、いわば新創成領域としての「マグロ学」を展開し、同時に大学の収益基盤にするという企業顔負けの戦略を描いている。

同様にして肩身が狭くて一昔前には「こんなことをやっていたら大学に残れない」と思われた、地歴学とか動物学とか薬草学とか発酵学とか都市学とか観光学と言った分野が、見直されつつある。皮肉な見方をするとこの傾向は、半導体の売り負けや電機会社の倒産にタイミングを合わせたかのようである。

博物学はもちろん昔からあった。ファーブルの昆虫記は小学校の推薦図書だったし、牧野富太郎博士もマクロ分類学の泰斗であった。学問そのものではないが作家の荒又宏さんはこれら博物学の大辞典を作るとともに、妖怪学のトリビアを言わば有用化する形で、大作品の「帝都物語」を書きあげた。

更に着目すべきは、歴代の皇族における博物学研究の流れである。昭和天皇はヒド口虫等の生物学全般、今上天皇はハゼを中心とする魚類学、皇太子殿下は水運論、最近亡くなられた三笠宮様はオリエント発掘学、臣籍降下された清子さんは鳥類学で山階宮家が創設された鳥類研究所の研究員、秋篠宮は家禽学で博士号、紀子さまは臨床心理学で博士号、眞子さまは美術評論学専攻と言った並びだ。

これには博物学やあらゆるバルキーな学問が、「全体俯瞰能力を涵養する」あるいは「均整の取れた人格を養成する」という意味で、帝王学に近いという理由もあるように思われる。比較すること自体が失礼ではあるが、鳩山元総理の量子宇宙論の頓珍漢さとは対照的である。

私はこれらの博物学の復権を、①ミクロに偏りすぎだった人類知の自発的なカウンタバランス作用であり、②デジタルの偏りすぎだった人類技術に対するアナログの再評価であると、好ましく思っている。分析より総合の方が本当は難しいのだ。

一見がさつで大雑把な博物学は精緻で微細で論理的な数理科学に比べて、「バカでもできる」と見られがちである。確かにバカでもバカなりの答えを出せてしまうところが返ってややこしい。だが博物学は本来、深い気づきと全体を俯瞰できる広い視野を必要とする、人の真の脳力が発露する分野なのだ。

地頭力（じあたまりょく）はどういう瞬間に光るのであろうか。人の知恵の発露として私は例えば三角関数の展開定理よりも、織田信長が討たれたことを聞いて嘆き悲しむ秀吉に「今こそあなたの天下がやってきました」ととっさに見抜いて告げる黒田如水の気づきを挙げたい。

こういう気づきこそが博物学に代表される、マクロでアナログ的な本当の知恵であり気づきだと思っている。

5、ひろゆきさんと蓮実センセー

月刊誌「文学界」の昨年9月号で、高名な評論家であり作家であり東大総長も歴任した蓮実重彦先生が、持論を展開している。「大学で文学は学べるか」という特集で、インタビュー記事の形である。

先生の答えは要約すると、「学生に学ぶ気力があれば学べるが、最大の障壁は文科省からの予算の低さだ」と言うことらしい。日本のような学閥長老社会では、このような華麗な経歴を持つ御年80歳の御大がそう言えば、業界一同「へへー」と平身低頭するしかない。

だが不肖私は文学にはまるで不案内の埒外人なので、気づいたことを正直に書き散らかしても幸いにしてお咎めがない。先生は文科省の教育行政にはかなりご不満のようで、有識者会議のある委員が言った「大学をG大学とL大学に分けよ」という指摘がそのまま現状の大学行政になっていることに、論を尽くして反論している。

ここでG大学とは世界に伍していけるグローバルな上位大学、L大学とは地域のリーダーを育てれば良いローカルな中位大学のことである。問題の委員の発言は要するに、「生徒の質に応じた適切なコストと目的で教育しろ」という指摘だ。さらに文学を例えに挙げて、「G大学ではシェークスピアを、L大学では観光ガイド用実戦英語を教えよ」と指摘し続けている。

蓮実センセーはどうも、この大学の差別化が国の補助予算の削減の理由に使われそうなのがお嫌いな様子だ。だがそれをストレートに言わないところがいかにも大先生の威厳であるらしくて、別の諸理屈を建てて色々と反論している。

第1の理由はこのような主張はナポレオン時代のフランスにもあって、全く陳腐だという主張である。第2の理由は海外の一流大学でもリベラルアーツは重視されているのに、18歳で学部や学科まで決めろと言う現行制度が学生の無茶な促成栽培になっているという主張だ。そして第3は、「日本の大学はシェークスピアの専門家すら居ないという体たらくだ」と言う主張である。

さらにこれらすべての大元の原因が、「国から大学への予算措置が現行でも主要国の数分の1なのにさらに低減しようとしている暴挙だ」という。そしてこの対策として国は、「企業の退職金を取り上げてその金を大学に回せ」と具体的な政策まで提案している。

文学的にはなかなか面白い提案だが、まず第1の理由について言えば陳腐か新規かは政策内容とは関係がない。次に第2の理由を実行すると大学卒業は25～30歳となってしまって、会社はオジサンだらけで結婚もできない。最後に第3の理由は、「文豪研究の専門家でござい」と称して安楽な飯を食っている大学教師が山と居ると言う現実をわざと見落としている。

そもそも「G大には古典でL大には実用会話」は標語的なたとえ話であるのは明らかなのに、それを「シェークスピアの専門家の程度」と言うマイクロかつローカルな話にすり替える巧妙さが、さすが大先生だけあって高度なテクだ。

もっとも本日の瞑想の目的は蓮実大センセーに歯向かうことではない。この記事のセンセーの主張が老害と老獪の典型に見えたので、一例として引用させてもらったのである。この先生が言いたいことを一言で言えば「昔は良かった」と言う、現状を無視したイデオロギー的な単なる懐古趣味である。そこへの屁理屈の付け方はさすがに年の功だけあって、若者では反論できないほど知識豊富だ。

こういう「懐古趣味＋年に比例した山知識」、これはなかなか強敵で、正面から戦いを挑んでも軽く蹴散らされてしまう。かといってセンセーに言われたとおりに実行していると鼻が曲がりそうな孔子の毒にやられて、時代の進歩がまるでない中世暗黒時代の再来になる。

ではどうしたら良いか。答えはある意味簡単で、先達や先生の忠告や指導など鼻から一切無視すれば良いのだ。先輩面したおせっかいな忠告者に限って、うまくいかなくても責任なんか絶対に取ってくれない。自分が泣きを見るだけだ。

冒頭の「大学で文学を学べるか」に戻ると、答えは「学べる」だ。ただし「文学は大学でしか学べないか」と聞かれれば、これも「学べる」と言う答えになる。人生や人格についても同様だ。では大学は何のためにあるかと言うと、数では圧倒的な中以下の生徒が麻雀とバイトに明け暮れるのを防ぐためだ。幸いなことに今のネットやスマホでいくらでも情報を入手できる時代である。やる気さえあればどこでも誰でも学べる。

蓮実センセーのご意見は「夏目や芥川も読まない奴が文学をやろうなど荒唐無稽」だそうだが、ここ10年か20年の間の文学の進歩と作品の洪水をどう見るのか。この先生には無意味だろう。だが私に言わせれば、今時に夏目や芥川など読んでいるようではもう化石になるしかないほどに、日本語自体が大進歩しているのだ。

映画も20年もすればリメイクされて新鮮な切り口になるように、絵画も文学も現代流にリメイクされるべきだ。墓守になるのではなく時代を切り開きたいならば戦前の古本よりも、最近の夏コミや冬コミで若者が交換し合っている20ページほどのスピノフした素人パロディ漫画冊子の方が、遥かに肥やしになる。

そんな時代を反映した象徴的人物が、2チャンネルのひろゆきさんやホリエモン元受刑囚なのだ。ひろゆき氏の言うことは無責任で努力が嫌いで常識がなくてつかみどころがない。だがだからこそ新時代の代表選手であり旗手であり象徴なのだ。

新時代に生きていると自然にひろゆきさんのようになっていくし、こういう人がジジイの苦言を態度で潰して、時代の中世暗黒化を防いでいるのだ。一言で言えば、ひろゆきさんこそが時代の救世主だ。ひろゆきさんは存在そのものが、センセーと言う名のガンコジジイを軽くバカにして吹き飛ばしている。痛快そのものだ。

どの時代でも最も大切なのは選択の自由である。その意味からはジジイ趣味になる選択もあるわけだが、時代と言うものは何らかの新大陸と言う牽引力がないと年功序列の儒教的暗黒になるという悪しき性格を有することは、歴史が証明している。その意味では自由とは当然にある物でなく、ジジイのたわごとにより超然としつつ獲得の努力を怠ってはならないものだ。

6、結び目の無限

結び目（ノット）は以前にも見たように、デジタルではあるが一行でも等間隔でもない。だから足し算も掛け算も入る余地がない。だが結び目の数は際限なく増やせるから、従来の数字と同様に無限を考えることはできるはずだ。

本日の瞑想は結び目を例に、従来の無限よりも複雑な無限について、そのありようを考えることにする。ちなみに従来の数字の無限は基本的に1種類であって、1, 2, 3...と行った時の無限、いわゆる加算無限である。これに対し整数でなく実数の数を数えると、これは加算無限より濃度が高く、これを連続無限と呼んでいる。

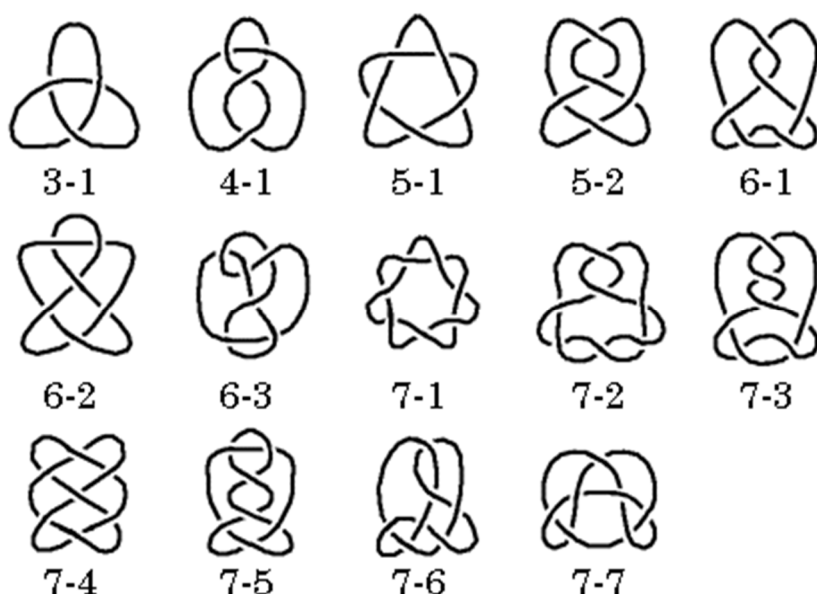
さて結び目を作る手立てには複数あるが、第一に典型的なのは自らにねじりを入れてこぶを作る、例えばゴム輪を基にクローバーノットを作るような作り方だ。もちろん輪を1回切って縛ってから再度つなぐ。この場合は輪の数自体は増えない。第二に分かりやすいのは、もう一つ輪を持ってきて互いに絡み合わすような結び目だ。「輪違い」とも呼ばれて鎖のように結び目ができる形だ。

現実の結び目には上記の2種類以外の結び方もあるかもしれないが、話を簡単にするために本日はこの2種類のみ考えることとする。つまり「ジェネレーターが2つのデジタル列」だ。この意味では従来の数字列は、「ジェネレーター1つの単純デジタル列」と言うことになる。

ジェネレーターが複数になるとそれらジェネレーターの交互の入り方は無限通りになる。しかも例えば、「最初に自分結びをしてその後に輪違をした場合」と、「最初に輪違をしてその後に自分結びをした場合」では別の結び目になる場合が多い。つまり結び目はしばしば順序によることになる。

もし順序に依らなければ結果としての無限は、単に2つのジェネレーターの個数比で決まることになって格別に面白くもない。だが結び目の場合は順序に依るために、あえて瞑想する価値が出てくる。ちなみにもっとも簡単な結び目の無限は、自分結びの1つのジェネレーターが並列にしか出てこないものだ。

もし自分結びだけでも並列でないと「どこに結び目を入れるか」、例えば「既に結ばれているところにさらに入れるか否か」でいわば「部分鏡対称」（カイラリティ）のようなアイソトープの数が増えて行ってしまう。つまり実はこの「自己ジェネレーター1個」の無限も、必ずしも単純でない。



（引用元：<http://v.rentalserver.jp/morigon.jp/Repository/SUBI0/mus.html>）

結び目は一般に、「順序」と言うものの入りようがない。だが「結び目の個数」と言う形で従来の数字が入ってくるために、一定のデジタルな規律は存在する。一番病的でないのは「星形」のように結び目が平等なもので、この無限がおそらく最も単純な無限だろう。

そしてこの単純無限に近ければ近い程、つまり星からかい離する「ヘテロ」が少ない程「その結び目が単純無限に近い」という意味で、結び目の複数個ある無限同士に「遠い近い」つまり距離が、常にではないが入ることになる。

次に輪違いのみの結び目の無限を考える。こちらは結ばれ方もさることながら、輪の数も結び目の数と一緒に増えていく。だからもちろんアイソトープはあるものの、その増え方が単純鎖のような増え方が最も分かりやすく、逆に鎖が枝風にぶら下がって増殖していくとヘテロになっていく。そしてそのヘテロ加減により、やはり常にではないものの遠い近いと言える。



(<https://theloadstar.co.uk/how-to-untangle-a-complex-supply-chain/>)

以上2例は「ジェネレーターが1種類だけ」という意味で、最も単純な2種類であった。それでも、①無限の個数は数字のように1種類でなく数え方にもよるが無限個になってしまう、②それらの各無限は「無限の世界」で連続はしていずおそらく孤立している、③ただ孤立しているがある程度の遠い近いは言える、といった様相を呈している。すでに無限が、従来の数字の延長ではない。

さてこれでさらに2つのジェネレーターを混在させたらどうなるか、混在のさせ方も色々あって、一番分かりやすいのは2つのジェネレーターを交互に入れるものだ。これも結び目が増えるとアイソトープも増えていくが、その様相は今見た2つの極端な場合の、全く真ん中と言うような単純なものではない。ただ全体観としては、あたかも両者が平等に混じったようなものになるだろう。無限としての存在と分布の仕方もほぼ同様である。

さてここでさらに一般的に、2つのジェネレーターを偏った配分で混ぜてみよう。偏り方には大きく分けて、①有理数比あるいは実数比でその意味で規則的に交互させる、

②乱数により無規則に交互させる、の2種類がある。いずれにしてもデジタルの極限としての無限を考えているのだから、無限数列の場合と同様に「出だしの有限個の違い」は無視できる。

さてここまで一般化した時に結び目無限はどのように分布しているだろうか。おそらく混合比を同じくした時のアイソトープ無限はもっとも単純なものを「原点」として離散的につまり空間と言うよりはネットワーク状に、適度の「遠い近い」を形成しながら分布しているだろう。そしてそこに分布比が無理数で入るとなると、かなり複雑になる。

この離散的分布加減はあたかも、我々の宇宙の星の分布のようなものだろうか。ただこういう数え方は、「無限に有限の場合の数え方を当てはめている」きらいがある。むしろ「無限的視点」からは、無限同士が「かぶりあって」いるのかもしれない。

もっと端的に、「結び目の無限は加算無限か連続無限か」を試してみる。結び目の場合、ジェネレーターが1個でもでも「新しい輪が今までにある輪を貫くか否か」でオンオフの関係になるから、ジェネレーター1個でいきなりその極限は連続無限だ。こういう無限は従来の数字では想像しにくい。つまりここまでの記述は、連続無限を無限個の加算無限で分布させてみた時の描像だと言える。

結び目の場合は個数と言う形でどうしても従来の数字が入ってきてしまう。他方本当の連続体、例えば脳空間とか意味空間のアナログのほとんどは、およそデジタルの極限で近似できないだろう。それでも結び目の無限によって、アナログ連続体のありようについて一定の光は当てられたのではないか。

7、無敵の人工知能様？

最近人工知能(AI)の進展が目を見張るようだ。チェス、将棋に次いで囲碁でも名人に勝って、「この手の競技名人打倒研究は終了した」と言われるほどだ。そして実際に人工知能研究は、ルール物から感性物に重心を大きく移しつつある。

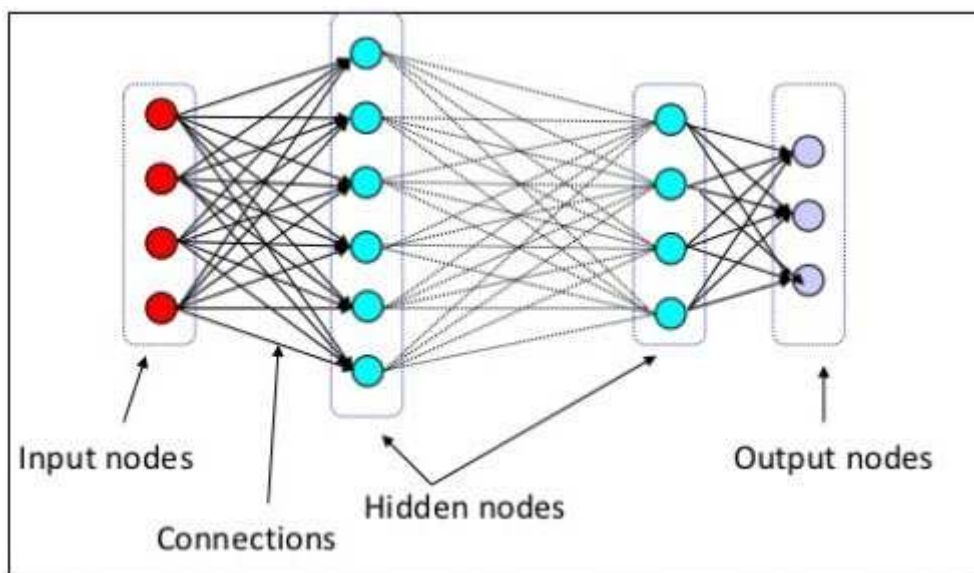
感性物とは究極の結果が勝ち負けと言うオンオフでなく、美しいとか素晴らしいと言った感情評価を主眼とするものである。この方向でもすでに成果が出始めていて、「AI美人点付けシステム」とか「AI制作短編小説」とかが出始めている。あたかももはや人は仕事をしなくて良い、いや人間自体が要らないという時代が来つつあるかのようだ。

人が要らないと言え、**「人せん滅AIロボット」**は今の技術でも作れるように思う。生体感知センサーを装備して、見つけ次第首を切るなり電気ショックを与えるようにプログラムしておけば良いのだ。もちろん人の側にも対抗策はある。**「人殺しロボット無効化ロボット」**を制作すればよいのだ。

この辺の攻防はある意味、パソコンのウイルスソフトとワクチンソフトの関係に似ている。互いに相手の弱点を突き合うのだ。だが人殺しロボットの場合には、決定的な違いがある。殺す方は生体を何でも殺しまくれば良いので、犬だろうが牛だろうがついでに殺してもどうということもない。

ところが殺人ロボット無効化ロボットの方は、工場内等で働く有用ロボットまで無効化すると産業が全滅してしまう。だから殺人ロボットと有用ロボットを何とか区別しなければならないが、そんなことは技術的に不可能だ。人は原爆やボツリヌス菌よりも、殺人ロボットで近未来に絶滅するのかもしれない。

さてここ数年のAI快進撃の推進力は、**「深層学習」**（ディープラーニング）と言う技法の実用化にある。この技術は脳のシナプスとニューロンの多層構造にヒントを得てパーセプトロンを何層にも組み合わせた、一種の自立型学習のAIである。



まず計算機を上図のように、多層構造のリンクとして組む。ここで中身はブラックボックス化して、人は入力と出力だけに注視する。人は中間層には関知しないし、そもそも見ても理解できない。そして入力に対して出力が予定通りだったら**「良し」**、間違っていたら**「ダメ」**と人工知能を教育する。この**「犬の訓練」**を繰り返すことにより、計算

機は自律的に多層のパーセプトロン間のリンクを太くしたり細くしたりと自己調節する。この自己調節によりAIは最適化されて、正解率を上げていくのだ。

このシステムで中間層は今指摘したように人には理解できない。これは「考慮過程は数値のままにしておき、ことさらに言語化つまり離散化や具体化させない」ということである。この非概念化は、我々が瞑想するときの脳の働き方そのものである。この非概念化によって、結果がより連続的になって精度が上がる。芸術について、「考えるな、ただ感じろ」と言うのと同じだ。

さて、深層学習の仕組みと精度が向上する理由を知ったところで、今まではルールゲーム応用だったところをどうやって感性評価に置き換えられるのだろう。これも原理は同じで、今まではゲーム勝利を動機づけとして結果の良し悪しを教育してきたところを、美しいか否かあるいは面白いかな否かを動機づけとして教育を施せばよいのだ。

ただ美しいとか面白いのは主観であって数字でないだろうという素朴な疑問はある。これはその通りなのだ。いくら深層学習の人工知能が脳の物理構造をまねたとはいえ、①入力も出力も中間層もすべて数字であり四則演算される、②学習の入力並びや結果の良し悪しはすべて人が外から与える、③ルールの骨子や初期値も外から人が与えるということで、従来の計算機シミュレーションの「弊害」はそのまま引き継いでいる。直感という言葉は無縁である。

つまり人工知能はいくら名人に勝とうが美人を判別できようが、①自分は何をしたのかは全く理解できていない、②その人工知能の設計者の予定範囲でしか成果を上げられない、③数値化がそもそも難しい対象や問題は正答率がどうしても頭打ちになる、と言った欠点を持つ。

だから「美人点付けAI」はできても、例えば平安時代の眉描きやお歯黒を「新たな美」として見いだせるかと言えばそれはできない。またAI小説と言ってもモチーフは外から人が与えるものであって、字句の段階からAIが積み上げて書けるわけではない。まあ将来は「作家助手」くらいには使えるかもしれないが。

問題が美人点付けのようにいくつかの寸法で数値化できることならまだしも、将来AIが絵画や小説等の芸術の、それも制作者でなく審査員になれるかと言うと、これは難しいだろう。その理由は、①数値を拾う代表的なタグ（寸法）がない、②順序とか系列と言った構造は数値化できないので拾いようがない、③美と四則演算はなじまないの
で限界がある等である。マクロなモチーフ理解は永遠に無理だろう。

ではAIはまったく創作的でないかと言うと、そこまで奴隷と言う訳でもない。それはAIが、①何百もあるルールの内の人々がまだ試みていない組み合わせを見出せる、②一度想定外になっても「想定外を見出す」ことにより新たなルールの追加をして成長する可能性がある、と言った特徴からだ。計算機の「何億回でも一瞬で計算できる」という能力が人より勝っている点の有効利用である。ただここでも、人のサポートが全くなく本当に自己成長するのは、難しいだろう。

AIがさらに発達した将来には、絵画や文学や芸能の賞の中に「AI賞」が新設されるかもしれない。例えば「アカデミー賞主演女優賞」ならぬ「アカデミー賞AI賞」のようなものである。でもそれはおそらく真剣な賞と言うよりも笑（ショウ）、つまり「ブービー賞」とか「イグノーベル賞」みたいなものが限界であって、人の感性能力まで凌駕されることはないと予測する。

8、ロシア人気質

ロシア文学の最高峰の「カラマーゾフの兄弟」、これを読むと気が滅入ってくる。息子兄弟による父親殺しなのだが、彼ら登場人物がいちいち性格破綻者なのだ。

- ・父フョードル：落ちぶれ貴族だが、不真面目で一々茶化す。女たらし&お調子者で皮肉屋。仕事はしない。アル中。
 - ・長男ドミトリー（ミーチャ）：生真面目だが父親嫌い。女を父親と取り合って親殺しでシベリア送り。そこで強制労働中に、事故で死ぬ。
 - ・次男イワン：頭脳は明晰だが無神論者。完全な多重人格で精神分裂（「悪魔」と呼ばれる全くの別人が顕現する）。フランスに催眠治療に行くが治らない。強迫的な記録魔。
 - ・三男アレクセイ（アリョーシャ）：出家するが還俗する。教師になるが辞めて、皇帝暗殺と革命を夢想する。
 - ・私生児スメルジャコフ：下男夫婦に育てられる。てんかん持ちでサイコパス。他人を精神操作できると妄想している。意味なく自殺する。
- （以上はスピノフ小説の「カラマーゾフの妹」より）

このようにカラマーゾフ一家は、全員が何らかの異常者だ。しかもその異常気質がとも親子と思えないほどに遺伝していないで、全員がバラバラで異常気質の一通りを網羅している。きっとロシア人にはこういう組み合わせが、不思議と言うより自然なのだろう。

「ロシア文学を読んでいると、ロシア人の半分はアル中か精神異常ではないかと思えてくる」と言う、良く知られた警句がある。「状況をこれだけ効率良くまとめた警句もそうそうない」と思えるほどだ。「罪と罰」等ドストエフスキーの他の小説はもとより、「人類愛作家」と思われているトルストイの作品にすら、これら異常の影がある。

手元に統計がないから分からないが、ここまで揃うとロシア人はあるいはロシアと言う国は、「異常気質を生成し愛着する土地柄だ」と思えてくる。少なくとも「ロシア人はこういう屈折に執着する性向を持つ」と、断定して良いように見える。

ロシアの大地のあの太陽の恵みの少ない、どこまでも森林が続く陰鬱な景色は、確かに異常だ。寒くてどうしても家にこもりがちになり、楽しみはウォッカだけだ。加えて土地は作物に向かず当然零細になり、国民のほとんどは希望のない農奴だ。とまあこんな「合理化」をしてしまいがちなのは、私だけであろうか。

そしてこんな土地柄がひいては、親兄弟殺しとか皇帝暗殺と言った内にこもった極限のようなことに、すさんだ人々の心を向けてしまう。その最たるものが、100年前の共産主義革命だ。農奴や奴隷労働者にとって共産主義革命は格好のはけ口だったし、レーニンなど再臨のキリストに見えたことだろう。籠った怒りはこうして爆発した……。

こう見てくると、共産主義革命が外ならぬロシアで起きたのは、偶然でなく歴史的地政的必然ではないかと思えてくる。革命自体は中国等他の諸国にも伝染したが、それら他の国では革命のありようが違った。国や土地がロシアのように悲惨でなく、それ故に「悲惨な土地柄が人民の精神までも腐らせる」と言うことがなかったからである。

最近私は、ソ連末期に米国に亡命したイリヤ・カバコフと言う作家兼芸術家の作品集を見た。もちろんソ連では新聞や真実も、革命と言う聖なる目的の一手段にすぎなかった。だから芸術も革命賛美でないと許可されなかった。カバコフはもはやソ連が崩壊した今でも、革命嫌いの癖が消えていない。

それにしても彼の作品に出てくる人物を以下に挙げてみる。

- ・「ゴミ屋敷のごみにまみれた男」と言う名の天使
- ・他人の発言を書き留めて止まない、単なる収集魔
- ・ソ連時代には共同だったトイレ、浴室、台所で痴話げんかをする住人達
- ・押し入れの中にしか住めなくて、ついには干からびる老青年
- ・どうしても画面の端にしか絵を描けない画家

- ・プロパガンダがデザインされた、倉庫に眠る壊れた瓶や缶の山
- ・ある日天井を突き抜けて、宇宙に飛び去った人

と言った感じであり、冒頭のカラマーゾフ一家の気持ち悪さを、上塗りしてなお余りある。

もちろんロシア芸術家の全員が、ここまで変質狂なわけではない。特に自由国の仲間入りをして国際化した現代の若手は、もっと「まとも」と言うか「非ロシア化」した「普通の」芸術家が多くなってはいる。だがそれにしてもやはりロシア人の底流に流れるDNAは依然として「精神異常かアル中」ではないかと、総体的に思えてくる。

ロシアの過去の歴史を振り返ると、これでもかと言う程の度重なる南下政策の繰り返しのだ。クリミア戦争然り、ネルチンスク条約然り、北京条約（沿海州の割譲）然り。それにそもそもの日露戦争と満州略奪だって、すべてその大元はロシアの南下政策にある。

そこまで寒いのが嫌いであるのなら、そんなところでわざわざ人を産んだり国を作ったりしなければ、初めから済んだことではないか。一体ロシアと言う国は人類延命上どのような価値があるのか、不思議になってくる。

9、豊田真由子先生の将来

「ハゲー」、「ちがうーだろー」、「そんなつもりはなかったのですう〜♪」、「豊田真由子様に逆らうのか!」、「死ねば? 生きている価値ないだろ」等の迷文句で、一躍有名になった豊田真由子センセー。

いくらオフレコとは言え、男でも恥ずかしいような吠え声をことごとくあからさまにされて、目下お笑いの恰好のネタだ。都議選にも偉大な成果を残した。今は入院と称して体の良い雲隠れ中、噂によると受け入れ病院は、強姦魔の上に札幌無罪買いの高畑裕太と同じ楽山病院だという。

国会答弁ではさもおしとやかな女性を装いながら、実は陰ではこんな態度に終始していた。まあそれが彼女だけだとは思わないし、録音されたことはある意味不幸であった。寝首を搔かれた感はある。でもそれ以前に散々にこういう態度をしていたであろうことから、同情の念もわからない。ただちょっと惜しいと思う。

何が惜しいかと言うとこのセンサー、桜蔭中高から東大法学部卒と言う経歴が、運の良い偶然だとは思えないほどに頭の回転、いわゆる地あたまが良いからだ。怒っている最中に「ハゲー」くらいは出てもミュージカル調や俺様物語など、よほど機転が利いて頭脳容量がないと自由に出ないものだ。

そもそも新人議員先生など知識も経験もないから、秘書たちの筋書き通りに演ずるのがせいぜいで、秘書たちに使われているのがこの世の実態だ。にもかかわらずこのセンサー、逆に議員になった次の日から秘書たちを怒鳴りつけて猛獣使いができています。これは並大抵の頭の切れではない。

他方でこれを録音した55歳の元秘書さん、やはり録音から聞こえてくるように相当にとろいおじさんのようだ。怒られてもびびっていて「済みません」を繰り返すだけで、言い訳も客観的な状況説明もできていない。これではさぞ仕事も出来なかったことだろう。

だいたい人間だれしも50歳を過ぎると頭も体も固くなって、せいぜいガードマンかマンションの管理人くらいしかできなくなる。そんなポンコツ爺さんを雇った時点で、もう大間違いだった。つまり今回の事件は一目でわかるダメ爺さんを採用してしまった、豊田センサーの人選ミスだ。自分の雑な採用行為が原因であり、その意味において自業自得なのだ。

とろい爺さんと地あたま抜群のインテリセンサー、たしかにとても待ってられない。怒鳴る気にもなろうというものだが、ここでもう一つの疑問が生じる。彼女ももう42歳だから社会人を20年もやっているわけだ。そして普通社会人の2年もやれば、この世のバカバカしさは理解するものなのだ。

世の中はあなたのような頭脳明晰な人のためにあるのではなくて、数で圧倒的な凡人のためにある。人気TV番組の「サザエさん」を見ればわかるだろう。そしてこういう頭が良すぎる人は、かえって遠慮しつつ歩かないといけないのがこの世の中だ。こんなことにも気づけないほどに、このセンサーは地あたまが良すぎたのかな～♪。まあ良い頭は日本のために生かしてもらわないと、性格を除けばもったいないと思うね。

そこでそんな彼女の為に彼女の将来について、不肖私がシミュレーションをしてみたい。国会議員の方の再選はもうないだろうが、他方で年金をもらえるまでまだ25年もあるのだから、何か「第二の人生」をやらないといけないだろう。

地あたまが良いと言うことで真っ先に思いつくのは、医者か弁護士だ。だが医者の場合は一人生育てるのに金がかかるので、生産性が考慮されるのが実態だ。よほど「無医村に行って地方創成に貢献したい」と言った奉仕の精神がないと、40歳過ぎでは成績にかかわらず入学許可が出ないだろう。

弁護士、こちらはそういう制約がないので行けそう。だが仮に成れたとして、現実の弁護士の仕事の多くは離婚か遺産相続だ。このセンセーがそんなとろくて下世話な話に、まじめに相談してやれるのだろうか。客を怒鳴り返してひんしゅくを買うのが、落ちではないだろうか。

ここは相手も優秀な人ばかりの職場を探すべきだろうが、厚生労働省の本省ですらダメだったのでおそらくそのような職場はない。ここは人を相手にしない職種、例えば人工知能だけを相手にするような職種が一番だ。とすると例えば株のトレーダーとかはどうだろう。

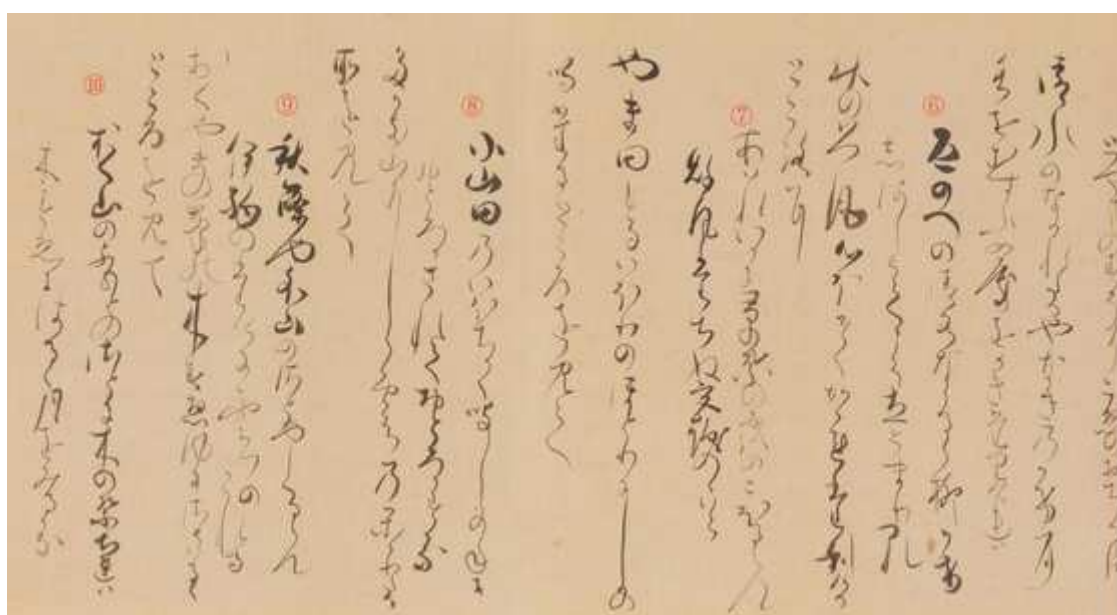
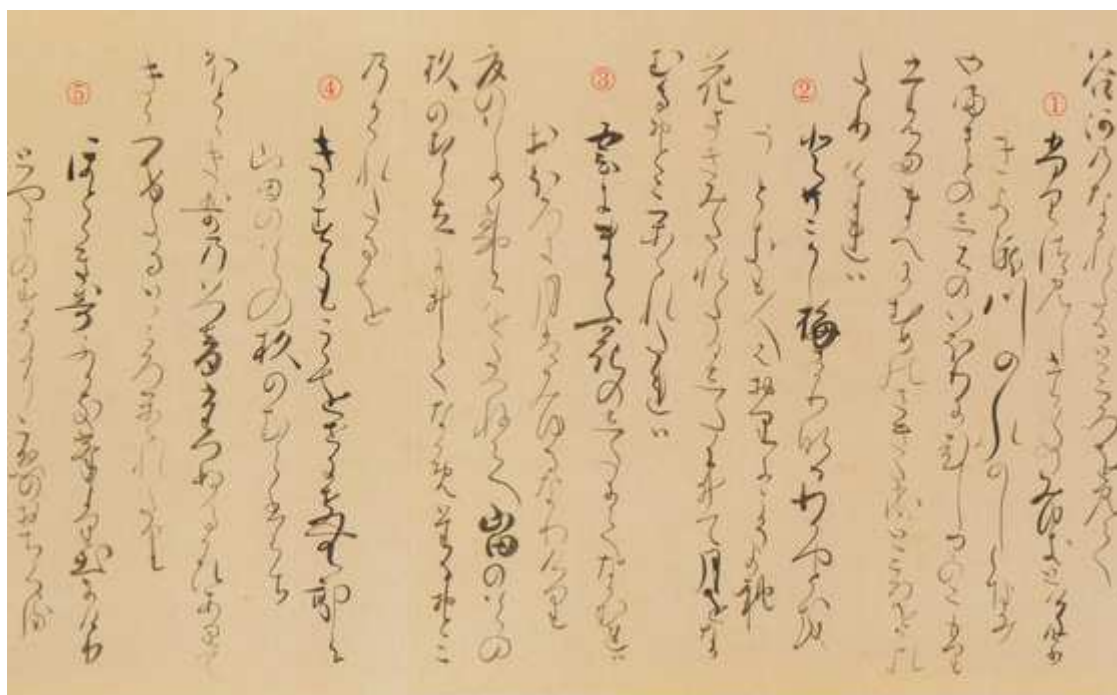
あるいはシュールなブラックユーモアが考えなくても口を次いで湯水のごとく湧き出る才能を生かすとしたら、お笑いなどは良いかもしれない。すでに有名になっているので、吉本とかに入れてもらえば出世も早いだろう。有吉と組むなんてどうだろう。

あるいは善意とか正義には無縁のようなので、新種の詐欺を考案するのも向いているのかもしれない。最近はやーさんも智能化してきて、経済詐欺など素人の私には難しすぎてとても理解できない。「オレオレ詐欺」があそこまで流行るとは、とても予想できなかった。

この人は一般人と常識が違うので、新規アイデアの発明には向いている。具体的にはプロデューサーとかイベント屋とかだ。実行が面倒なら思いついたアイデアを売って、だれかもっと現場向きの人にやらせてその上前を頂くことにすれば良いのだ。

あるいは不名誉の後でちょっと難しいかもしれないが、人の利口バカは鋭く見極める眼力を持っているので、社外取締役など向いているかもしれない。東芝だってこの人を取締にしておけば、「このバカー、死ねー、辞めろー」とか「ちがうーだろー」とか指摘してくれて、今の体たらくは防げたかもしれないのだ。

10、西行物語の歌



西行法師の生涯を語った「西行物語絵巻」の初段に出てくる短歌10首を、絵巻の変体仮名から起こして標準語漢字仮名遣いに変換しました。今回は私と言う人間がやりましたが、これと同じことを人工知能にやらせようというプロジェクトが進行中です。

それぞれの歌について、①変体仮名の元の漢字、②ひらがな読み下し、③漢字カナ交じり文の3段構成になっています。なお毛筆の変体仮名の書き起こしにおいては、MSワードのエラーを避けるために、最低限のカタカナ書等の改変を施してあります。

①布里津見之 堂可年乃美由支 止介尔介利 幾与滝川乃 水乃之良奈美
ふりつみし タカネのみゆき とけにけり きよたきかわの みずのしらなみ
降り積みし 高嶺の深雪 解けにけり 清滝川の 水の白波

②登女己可之 梅左可利那留 和可也土波 宇止支毛人乃 於里尔己曾与礼
とめこかし うめさかりなる わかやとを ウトキもひとの おりにこそよれ
止め来かし 梅盛りなる 我が宿を 鬱陶きも人の 折りにこそ依れ

③雲尔末可不 花乃下尔手 奈可武連八 於保呂尔月毛 美由留奈利介里
クモニマカフ はなのしたにテ なかむれは オホロニつきも ミユルなりけり
雲に紛う 花の下にて 眺めれば 朧に月にも 見えるなりけり

④幾可寸止毛 己々遠世尔世無 本止々騎寸 山田乃八良乃 杉乃武良多知
きかすとも こゝをせにせむ ほととぎす やまたのはらの すきのむらたち
聞かずとも ここを瀬にせん ほととぎす 山田の原の 杉の叢立ち

⑤保止々幾寿 多可幾峯与里 出尔介利 当也未乃春曾尔 己恵乃支古由流
ほととぎす タカキミネヨリ いてにけり とやまのスソニ こうえのきこゆる
ほととぎす 高き峯より 出でにけり 遠山の裾に 声の聞こえる

⑥道乃部乃 新美川奈可留々 柳可遣 志波之止手己曾 立止末利介礼
みちのへの しみつながルル やなきかけ しはしとてコソ たちとまりつれ
道の辺の 清水流れる 柳陰 暫しとてコソ 立ち止まりつれ

⑦安八礼以可尔 草葉乃露乃 己本留良無 秋風堂知奴 宮城乃々八良
アハレいかに くさはのつゆの コホルラム あきかぜタチヌ みやきののはら
哀れ如何に 草葉の露の 零ルラム 秋風立ちヌ 宮城野の原

⑧小山田乃 以保知可久鳴久 之可乃年尔 於止呂可左礼手 於止呂可之化里
おやまたの イホちかくなく しかのネニ おとろかされて おとろかしけり
小山田の イヨ近く鳴く 鹿の音に 驚かされて 驚かしけり

⑨秋篠也 遠山乃左止也 之久留良尤 伊駒乃立介尔 久母曾可々礼留
あきしのや とやまのサトヤ しくるラム いこまのたけに クモソかかれる
秋篠や 遠山の里や 時雨ルラム 伊駒の岳に 雲ゾ掛かれる

⑩於久良山 不毛止乃左止尔 木葉知連八 木寿恵尔波留々 月遠美留可奈
おくらやま ふもとのサトニ きはチレハ コスエニハルル つきをみるかな
小倉山 麓の里に 木は散れば 梢に張るル 月を見るかな

（参考サイト：https://blogs.yahoo.co.jp/kororin_sisyou/10500506.html）

11、最近読み終えた小説4編

最近たまたま4本の小説を読み終えたので、その概要をここにまとめておきます。

1、「カラマーゾフの妹」（高野史緒著、講談社、2012年）

平成24年（第58回）江戸川乱歩賞受賞作。世界的に著名なドストエフスキーの代表作「カラマーゾフの兄弟」の13年後を記して、ドストエフスキーが書かずに死んだ結末編を彼に代わって著して一連のなぞ解きをしたと言うもの。推理小説仕立てのスピノフ小説だ。

ドストエフスキーの原作では「父のフォードルを殺したのは長男のドミトリー」と言うことになっている。だが本作では次男のイワンが犯罪捜査官に成長して当時の判決に疑問を持ち、原作の矛盾点を挙げつつ再捜査するという筋書きになっている。

そして見つけた真犯人は、一番まじめだった三男のアレクセイだった。殺人の動機は、修道院時代に師である長老を彼の名誉のために殺したことだ。その際に殺人に恍惚となる自分を発見して、その味をしめて父親を殺したという結論になっている。

題名は、原作には居なかった妹が実は居て彼女が犯人だったように思わせる。だが妹は出てくるものの、心理的役割に留まる。

2、「ラ・ミッション」（佐藤賢一著、文芸春秋、2015年）

幕末から明治維新に至る幕府軍の敗走を、当時徳川幕府の軍事顧問を務めていたフランス顧問団のブリュネ大尉を主人公に、「外人」と言う真逆の視点からその敗走の原因といきさつ、そして幕府側との交流を描いたもの。

当時は幕府側をフランスが薩長側をイギリスが支援して、両国の植民地争奪戦の様相を呈していた。フランス側は本来勝てる目算で居たところ、徳川慶喜の突然の大坂城退去と言う敵前逃亡の失策により、戦略的には大きく後退してしまう。

それでも徳川側はまだ軍事物理的には互角に戦えたものを、薩長の勢いと官軍と言う日本固有の位置づけによりどんどん崩れていく。最後は未開地の蝦夷だけでも何とか抑えようとするが、これも政府軍に陥落されてしまう。

全体として、「陸軍のフランス対海軍のイギリス」及び「カトリックのフランス対プロテスタントのイギリス」と言う構図がある。「戦争の最後は白兵戦が制するのでフランス側が有利」と読んでいたところが、死を恐れぬ政府側武士たちによって五稜郭も占領され、決定的に敗北する。

幕府軍側で元新選組の土方が、実は生き残って顧問団とともにフランスに落ち延びたという結末になっている。

3、「帝都物語」(荒俣宏著、角川書店、1986年)

本来のところ全12巻からなる長編であるが、とりあえず映画化もされている第4巻までを読み終えた。実際に第4巻で一段落と言った構成になっている。本シリーズが書かれたのはもう30年も前で、今ではその映画版すらツタヤ等において探せないほどだが、話自体は決して色あせていない。

かつてヤマト民族に滅ぼされた「まつわらぬ民」の末裔である加藤保憲中尉が、あらゆる妖術を使って日本を滅亡させようとするというのが主題である。サイキック小説の元祖で、著者の博学と構想企画力は並大抵ではない。

加藤は先ず江戸中央政府を憎む平将門の霊を呼び出して、これを用いて地脈を狂わすことにより日本を滅ぼそうとする。明治期末のことだ。これに気付いた安倍晴明の子孫の土御門家が対抗しようとするが、逆に滅ぼされる。

加藤は中国伝来の秘術である奇門遁甲を用いて竜の地脈を捻じ曲げ、それで東京大地震を起こして東京を壊滅させる。だが成果不十分として今度は天の軌道を捻じ曲げようと、月と北辰(北斗七星)を動かそうとする。ところが将門神社の巫女である目方恵子に見破られて、戦いを挑まれる。死闘の末に相打ちになったところで、この部は終わる。

同時に渋沢栄一による首都改造計画も進み、昭和2年には日本初の地下鉄も開通する。この工事においても隧道が竜の地脈を踏む形になり、日本初のロボット「学天則」を投入する。ここでも竜や式神と死闘の結果相打ちになり、ロボットも壊れるが地下鉄も通る。

寺田寅彦、幸田露伴、渋沢栄一、泉鏡花と言った有名人も登場して活躍する。なお「影の主人公」である加藤は、5巻ではほとんど出てこない。

4、「宿神」(夢枕獏著、朝日新聞出版、2012年)

上記した荒俣宏さんと並ぶ伝奇物の第一人者である、夢枕獏(むめまくらばく)氏による長編物である。先ず20年ほど前に朝日新聞に掲載された。設定された時代は平安末期で、全4巻約1300ページの長編である。

主人公はかつて北面の武士であった佐藤義清こと西行法師だと思われるが、霊界と交流ができる架空の登場人物の申(さる)とすべきかもしれない。副主人公格には北面で西行の同僚だった平清盛及び後に文覚(もんがく)上人となった遠藤盛遠、さらには西行がひそかにあこがれて出家のきっかけを作った皇后の待賢門院環子(たまこ)と言ったところか。

先ず盛遠が同僚の源渡の妻の袈裟御前に懸想をして、誤って殺してしまい出家する。これはあたかも、西行の出家の前奏である。西行は環子の病死に触れて、世をはかなんで出家する。他方清盛は色々ありながらも、保元の乱の勝負強さと手柄により出世を始める。この辺は歴史及び古典籍の通りである。

ただその随所で申が出てきて、「あれ」と呼ばれる宿神を呼び出しては裏で歴史を作っていく。そして宿神は限られた人しか見ることができず、申の他には西行と環子と後白河法皇くらいであった。

保元の乱、崇徳上皇(新院)の讃岐流罪、平治の乱、清盛ののし上がりと死、平家の没落、奈良大仏再興のための奥州勧進の旅等を淡々と経つつも、その陰に常に申と宿神(ミシャクジ)の存在がある。宿神の起動のきっかけは、蹴鞠等の振動あるいは往復運動である。物語は西行の死をもって閉じる。

なお、これと同時代の作品として「巴御前」と「鎮西弓張月」も少し前に読んだが、これらについては別の機会にまとめる。

12、波乱万丈

もう40年ほど前になるが、ユーミンこと荒井由実（松任谷由実）が新しい感性の歌で若者の心を掴んだ時代があった。そんなユーミンの歌の1つに、「ソーダ水の中を貨物船が通る」と言う下りがある。

ユーミンがこの情景を見たのは、本牧の小高い丘にあるとある喫茶店だ。ちょうど遠くに東京湾を見下ろせる位置に、今もある。そんな明るい日差しの中で注文したソーダ水、おそらく薄い緑色で泡が立っていたことだろう。そしてそのソーダ水の向こうに、貨物船が通るのが透けて見えた。

一見何気ないそのままかの歌詞であるが、きわめて詩的である。私などはその時のユーミンの気持ちのみならず、たまたま通ったその貨物船の船長や船員はどういう人だったのだろうかと言うところまで、深く連想したものだ。この歌に限らず詩の余韻とは、そういうものだろう。

ところが翻って自分の周りを見回してみると、家族や親戚はもちろんのこと、今までに学校や会社や趣味で出会った人々全員を見回しても、皆平平凡凡な人たちだ。「この人の人生をもっと知りたい」と感じた人は、一人もいない。

もちろんその個々人にもそれぞれに、それなりの喜びや悲しみがあつたことだろう。ただそれらはことさらに特筆すべき程ではなくて、誰にでも起こる程度の、寿命の終焉とともに忘れられて当然な程度の感情の起伏や出来事なのだ。

もちろん視点を世界歴史に広げれば、特筆すべき波乱万丈の人物はそれなりにいる。平清盛とか豊臣秀吉とかナポレオンとかだ。でも極めてまれであって、たまたま通った貨物船の船員など、仮に知ることができかつ日々を記録できたとしても、現実には退屈なほど平凡だろう。

この退屈するほどありふれた市井の人をたとえ一瞬であろうとも知りたいと思う矛盾、これを一体どう考えたら良いのだろう。一つの答えは、テレビ東京の素人をいじる番組だ。テレビ東京は「素人を主人公にする番組」と言う新境地を開拓したが、不思議と言うか結構な視聴率を取っている。

これにはからくりがあつて、先ず素人を選ぶ時点で候補になるのは100人に1人だという。その候補についても、カメラを何十時間も回し続けて面白いところだけを編集す

る。それでもつまらない人は捨てるそうだ。だから素人いじりと言っても、実はエントロピーの減少に膨大なエネルギーを払っている。こういうことなら理解できる。

もう一つの答えは、小学校の社会科の教科書の「仕事を知ろう」コーナーだ。誰とは言わないが消防士とか土木作業員とか漁師とかそういう人たちの仕事をクローズアップして、生徒に世界の広さを学ばせる。こちらはその紹介された人が「業界の代表者」として意味を持つのであって、その意味で誰でも良いのだが独りで十分だ。

こう見てくると、「たまたまユーミンのソーダ水に映った貨物船の船員」の立ち位置も見えてくる。これはある意味、片思いのようなものだ。感情移入する我々リスナーの、感情の働き方の典型である。寸止めで「ふと関心を抱く」ところで辞めるのが上策で、万一詳しく知ってしまっても「船員というものの日常の業務形態」と言うちょっとした別世界を垣間見るに過ぎないのだ。

さらに瞑想を進めるならば、先に挙げた大河ドラマの主人公になりそうな稀代の英雄たちについても、私たち視聴者はその人の人生全部を平らに知りたくて見ているのではない。実際にはその人の「興味深い瞬間」と言う切り口でのみ、知りたいと思うだけなのだ。

徳川家康の日々と言っても、その9割以上が何気ない平凡な日々だろう。その平凡なある日々の、「茶饅頭はどんな饅頭だったか」などの羅列など、仮に何らかの記録があって判明したとしても、知りたくもない。ましてやたまたま通りがかった凡人の日々など、およそ知る価値もない。強いて言えば「今この記事を読んでいるあなた」と何ら変わらないのだ。

つまりまとめると我々は、たとえ超有名人と言ってもその人の人生全部について知りたいのではなくて、事件と言う出来事に置いて知りたいだけなのである。この意味において「ユーミンのソーダ水を通った貨物船」は、その1回限りにおいてかつリスナーその個人において、ちょっとした「事件」だったと言うだけのことだ。

あるいはテレビ東京がそういう人をうまく捕まえて人生番組を作るかもしれないが、それはその業界をたまたま代表する無名の1個人でありかつ1回限り、しかも編集してつまらない9割を捨てた後と言うシチュエーションでやっと思意があるのだ。これがユーミンの歌の素朴な疑問に対する答えである。

文学の本質は余韻にあり、それ以上知らないほうが返って情報価値が高い。文字通

りの波乱万丈など、現実にはない。

13、夢と解釈(その14)

＜夢1＞私は地震か火災に遭って、主要な家財と食べ物を持って必至で家を逃げ出そうとしている。一切合切を大きな風呂敷に包んで家を出ようとするが、荷物のあちこちが柱に当たってちっとも外に出られない。やっと外に出たと思ったら今度は路上でひっきりなしに荷崩れがして、前に進めなくて途方に暮れている。

＜解釈1＞昨日に関東大地震の記事を読んだせいでしょうか。

＜夢2＞某国の親善会に出席して、歌や踊りを見たり聞いたり一緒に踊ったりした。その後流れ解散になり近所の駅に向かった。ところが出席していた若い男性の一人が私と知り合いになろうとして、しつこく話しかけてくる。面倒だったので、適当にはぐらかした。すると今度はインド人がやってきて、「マネーマネー」とバクシーシを要求する。私は「ノーイングリッシュ」と言って、またはぐらかした。そうこうどさくさをしているうちに、自分の居場所が分からなくなってしまった。そしていつの間にか、知らない喫茶店に入り込んでいた。

＜解釈2＞私のモットーは「一期一会」(面倒な知り合いにならないうちに永遠にさよならする)です。

＜夢3＞知り合いの2カップルで横浜の裏道を散歩していたが、私だけ少し遅れてしまった。すると格好の良いスポーツカーに乗ったお兄さんが私に声をかけてきて、車に乗せてくれるという。「女の子じゃないのに変だな」と思いつつも、乗せてもらった。するとその車の馬力がすごくて、あたかもジェットコースターに乗っているようだった。ドライブが終わった後その男の子が、「みんなに自己紹介したい」と言う。聞いてみるとまだ16歳だがカーレースの免許を持っており、その車も自分で輸入したそうだ。

＜解釈3＞横浜のみなとみらい地区で、本物のジェットコースターに乗ったことはあります。

＜夢4＞米国に赴任していたが、帰国命令が出た。私は日本独特のねちっこい付き合いが大嫌いなので、何とか逃げようとして徒歩で逃避行を開始した。ところが1日かかってもやっと隣村で、とても逃げ切れない。幸いその夜はその村で豚肉祭りをやっていたので、中心人物的な気の良いオヤジの家に泊めてもらった。だが仕方ないので再度戻って、今度は車が飛行機で逃げようと画策している。

＜解釈4＞若いころはこういう気持ちでしたが、もしそのまま不法滞在をしていたら、今頃は日本文化が懐かしくなっていたことでしょう。

＜夢5＞私は生物学者で、環境の汚染物を食べてしまう新種の蚕を開発した。葉緑素が入った緑色の蚕だ。そしてその蚕の生育を、若い女性の助手に任せている。ある時その女性が、「休暇を取りたい」と言ってきた。ちょうど良いタイミングだったので、彼女のそれまでの成果をチェックした。すると仕事は極めて丁寧かつ順調で、飼育ノートも良く書けている。私は彼女を称賛するとともに、休暇を許可した。

＜解釈5＞最近博物学を再評価していることの表れですかね。

＜夢6＞私は映画の音入れをしていた。ところがふざけてところどころにカラスの鳴き声を入れて、原作よりも怪奇物風に作ってしまった。視聴者から当然に苦情が来る。上司に「どこが変だかお前も聞いてみろ」と言われて、みんなの前で視聴させられた。ところが自分が作ったものなので、どこでカラスが出てくるかを全部言い当てられる。かえって「あなたは予言者だ」などと尊敬されて、若い女の子にも「付き合ってください」などと言いつけられた。私はその誘いを軽いなして、音もなく去っていくのであった。

＜解釈6＞私の如き者が、女の子に告白されて断るはずがありません。これは単なるヒーロー願望でしょう。

＜夢7＞みんなで映画を見ていると、山紫水明な田舎の景色が出てきた。そこで「私たちの出身地もこんな感じです」と解説すると嫁様が突然怒りだして、「私の生まれた所はこんな田舎ではありません、変な噂は流さないでください」と、口をとがらせて文句を言った。そして皆に笑われた。

＜解説7＞本当にそこまで田舎ではないのです。だからなぜそんなことを言ったのか、見当もつきません。

＜夢8＞うちの会社が役所に製品を納品したので、納品検査に立ち会った。そしてその後役人に誘われるままに、近所のレストランで会食した。ところがこちらが接待すべきなのに、役人様がどんどんお酒を注いでくれる。なんとなく当たり障りのない世間話をしていたがついに酒が回ってしまい、失礼なことにダウンして寝込んでしまった。

＜解釈8＞夢の中でさらに寝るって、一体どういうことでしょうね。「浪速のことも夢のまた夢」。

＜夢9＞我々は汚いサルベージ船に乗せられていた。しかもそこから逃れる仕組みが、「電子順位」になっていた。つまりとびとびの電子順位に応じて曳行船に止まり木があり、運よく光が当たった人は励起してその止まり木に移れるという仕組みだ。なおサルベージ船のレベルに電子順位はないので、一度逃れられれば二度と戻ってこないし、ほかに逃れる方法もない。長くて息苦しい訓練の間、私にはついに光が当

たらなかった。そしてタイムアウトになって、我々残った連中は戸が開いて解放された。外の空気が妙にうまかった。

<解釈9> 自衛隊幹部候補生の行軍訓練物を読んでいたので、その影響でしょうか。

14、地方創成(その上)

「地方創成」、これは第2次安倍内閣が始まってからすぐに提唱された政策だから、もうかれこれ3年以上たつ。その理念は「地方創成によって人口減の歯止めをかけるとともに日本経済の活性化を狙う」と言う、いわば広義のアベノミクスの重要な柱と言うことらしい。

まあ本来のアベノミクスは財政、金融、民活の3本柱だから、地方創成はこの内の主として民活と言うことになるだろう。地域多様性による活性化を目指すという意味では、雰囲気的にはアベノミクスの的だろう。ところがここでまじめに瞑想してみると、どうして地方創成が人口増や民活に繋がるのか、少なくとも私にはまるで見えてこない。

政府の公式文書である「地方創成の推進について」(26年10月11日)を見ると、地方創成の目標に人口増は謳ってある。しかしどうして地方創成が人口増になるのかのからくりは、どこにも書かれてない。「若者に夢と活力を与える」等々の、空しい官庁用語が羅列されているだけだ。

民間のシンクタンクの報告等や専門家の意見を見ても、「地方創成＝人口増、経済再生」を明快に説明したものは見つからない。それどころか逆に、「地方創成は必ずしも人口増や経済再生につながらない」と分析する専門家すらいるのだ。

私の素人考えでも、大都市には大都市としてのシナジー効果(相乗効果)があって経済は累乗的に発達すると思うし、逆にわざわざ「娯楽なし・病院なし・スーパーなし」のような不便なところに好んで住みたい人の方が希であろうと思う。意味なく見知らぬ田舎に転勤辞令をもらいたい人なんて、居ないよね。

まあ田舎の方が土地家屋や家賃が安いとか、ICTが進歩すれば地方でも同じ仕事ができると言った要素はある。だが現に多くの人々が都会やその郊外に住みたいから、一極集中と言う結果が生じるのだ。これを無理して「地方に住め」と旗を振っても、共產主義国ではないのだから土台無理だろう。

例えばソウルには韓国の全人口の4分の1が集まっているが、だからと言って特に困っていない。また江戸時代に世界最大都市であった江戸は、参勤交代等の制度もあって、全日本の消費の実に6割が江戸でなされていたという実績もある（日比谷図書館）。

一極集中で具体的に困ることと言えば、90年前の関東大地震が再来したようなケースだろう。だがこのためだったら、数個の予備センター都市を設定しておけば済むことだ。「せっかく切り開いた限界集落の歴史が終わるのはもったいない」という発想もあるいはあるだろうが、都会のシナジー効果はこの無駄をはるかに上回る生産効果を上げている。

でもまあそこは置いておいて、とりあえず地方創成が人口増や経済再生に寄与するとしてみよう。そして「どのように地方創成をすれば人口増や経済再生ができ、それがどこまで届いたら成功と見做せるのか」、この点を問うてみる。

地方創成の成功例を見るために先ず、「田舎力—ヒト・夢・カネが集まる5つの法則」という本を読んでみた。ちなみにこの本は、安倍さんが地方創成を言い出す前の2009年に書かれている。この本によると「5つの法則」とは①発見力、②ものづくり力、③ブランドデザイン力、④食文化力、⑤環境力の5つだそうだ。

そして具体的には、①古民家のリノベ、②田舎料理のブランド化、③第六次産業立ち上げ、④体験型施設、⑤直売所、⑥自然志向等の方策を挙げている。そして「居直りの逆転的発想」を基本に、「ないからこそできることの発見」とか「ちょっとした発想の転換」を奨励している。

さらにこれらが空論でない証拠として、実際に村おこしに成功した約20の市町村も例示してある。ただこの本の「イケイケどんどん」は、私の実感と程遠い。そもそも村おこしにイベントとかユルキャラとかそう言った「一発花火」は容易なのだが、継続の方が難しいのだ。

まあ「ドブろく特区」などは、まだ成功した部類に入るのだろう。だが例えば6年前に映画「のぼうの城」で活性化を図った行田市、この活性化は一過性で今はただのおとなしい地方都市である。だからこの本に挙げられた20市町村の、今をこそ知るべきなのだ。

そこで今度は「地域再生の失敗学」（2016年）という本を読んできた。ほとんどの村おこしはせいぜい一発花火で終わっているだろうから、失敗例から反面教師的に見た方が、実態がはっきりと浮き彫りにされると踏んだからである。

予想通りに、この本は明快である。この本の初めに「地方」の定義と「創成」の定義が出てくるが、まず地方については「人口10万程度の地方都市」としてある。限界集落の問題では全くない、眼中になくて相手にすらしていないのだ。人口10万人というと県庁所在地に次ぐ地域中核都市と言った辺りだろう。

ウィキ等で調べてみるとこの条件に該当するのは例えば宇和島市、米子市、弘前市、岩見沢市と言ったクラスだ。やはり知名度はあるだろうが蕪崎市、三沢市、赤穂市等はもはや「切り捨て地方」になってしまう、つまりこの本によると蕪崎市等はもはや手を施してもしょうがない地域なのだ。まあ現実的な定義ではある。

次に成功指標だが、これはずばり銭だ。「素晴らしい地域の文化を残してほしい」と言った郷土愛に基づく地方創成を夢見る人も世の中には居るだろうが、そんなことはほとんど何の原動力にもならない。田舎人だから朴訥で純粹だろうなどと言うおとぎ話は初めから対象にしていない。

そしてその銭の達成ラインは「イベント実施や広告等の総支出を超えた大収入」であり、「その地方が全国平均以上の継続した収入を得ること」だ。以上をクリヤして初めて「再生したと言える」と言うのが、この本の前提である。こういう現実的な前提に立てば、失敗例とその要因はゴロゴロ出てくるだろう。

15、地方創成(その下)

この本で強調しているのは、高度成長期の「工場誘致や箱物行政でドーンと再生する時代は終わった」と言うことだ。好みも趣味も人生の目標も余暇の楽しみ方も未来展望も、今の人々は皆まるで違って多様化した。そもそも箱物だって、「都会のゼネコンを潤して田舎の維持費がかさむだけで大した雇用も生まれなかった」というのがその論拠だ。全くその通りだろう。

ただ残念なことはこの本にしても、「工場誘致」に代わる分かりやすい新たな指標を打ち出せてはいないのだ。この多様化して経済も左下がりの時代には、そんな指標は実際に無いのだろう。結局は「自分で考え自分で汗を流して試行錯誤をして手を広げていきなさい」と言う、多分に精神論的な手順しか示せていない。

特に要注意で最悪なのが、行政支援とは結局補助金だと言う。地方もその補助金を都会のイベント屋に丸投げして1回花火を挙げて、ちょっと話題になっただけで誰も損しないでお終いと言うコ〜スだ。これは典型的に工場誘致の発想から抜け出していない良くあるケースだと、警告している。

逆に奨励できる開拓例としては、①地元特産品の工場が都会のベンダーに買いたたかれるのを辞めて、工場を見学や体験もできるようにする。さらには、②傍らに喫茶部やお土産コーナーも作り、できれば駅や集会所の近くに販売店も作って垂直的に手を広げる。③組織も会社組織にしていく、という方向だそうだ。

逆に今流行りのユルキャラは、「やった気になるだけで実はほとんど収入増になってない典型」だという。具体的にはあのくまモンですら、皆「かわいい」と思っても「わざわざ泊りがけで新幹線に乗ってこれの本場を見に熊本まで来る人はほとんどいないだろう」と指摘している。

さらに「やる気のある地元の若い人に頑張ってもらって」という意味での旗振り役は重要で、こういう人を応援するのが正しい行政だという。たしかに若い人や特に起業したい人は、新しいことをやる意欲があってキーパーソンだろう。だが「一定の個人の能力に頼ろう」と言うのは、多分に精神論に過ぎるように私は感じる。

私は子供のころに、田舎に住んだことがある。田舎人の特徴は、都会人に対する反感と彼らの内輪意識だ。決してよそ者を、最後まで中に入れようとはしない。擾乱のない同じ生活が毎日保障されれば、それ以上はむしろ迷惑だというのが本音なのだ。

だから地方創成と言って例えば体験施設や公園を作っても、「都会のよそ者は決められたところだけ歩いて金だけ落として帰れ」と言うのが本音なのだ。さらにはシャッター通りと言ってもその商店主も壮年以上ならば、「最後はこの一等地を売って先祖のお墓の隣に住めばよい」と思っていて、それ以上余計な事態などあって欲しくないのだ。これはこの本の著者も認めている。

またこれは友人について本当にあった話なのだが、農業体験ボランティアに応募したところ場所は地方のド田舎で宿所は崩れかけた倉庫、そして体験と称して人足のようにこき使われて夜はまずい配達弁当。結局その地域は安い人手をタダ同然で使って、その剰余分を安楽に自分の懐に入れたいだけだったのだ。よそ者に地元を知ってもらいたくなどない。

うちの最寄りの駅の裏通りに商店街がある。「かつての街道沿い」と言う立地だが、今はさびれている。そしてしょうもない地蔵をさもたいそうに宣伝したり、立ち寄り施設を作ったのは良いが誰も面倒な管理を引き受けないのでホームレスの寝場所になっていたり、年数回ほど形ばかりの「セール」をしたりとか、一皮むけば「自分の店が儲かりたいだけのエゴの烏合の衆」が見え透いている。ますます寂れる一方で、私も不愉快なので2度と行かない。

結局地方は、内輪で買い合っているだけの閉じた商店街になっていく。今は郊外SCとドラッグストアの時代で、商店街の役割は終わったのだ。地方創成もこの寂れた商店街と同様で、戦前の満州開拓団ではないが「旗だけ振ってちょっと金をつけておわり」では、到底に無理筋な話なのだ。

別の例を挙げよう。伊豆半島とか箱根とか奥日光とか、どうしてわざわざこんな奥地に集客施設があるのだろうか。かつては気候が良いとか風光明媚とかがあったのだろうが、今はネットやゲームを始め種々の発達で、気晴らしも転地だけではない。わざわざ手間と金をかけてほとんど意味なく奥地に行く、これは私の目にはもう気違い沙汰だ。

よっぽど金を捨てたいのか、それとも遊びを見つけるという通常の凡人能力すらなくて観光業者に踊らされているのか。「これも雇用創成だ」とあえて屁理屈をつけるにしても、こんな不便な所で誰も好き好んで働きたくないだろう。地方創成と言ってもそもそんな人工開拓地に、残すべき伝統文化すらないだろう。

「温泉に浸かってリフレッシュできる」、なるほどこれは確かに都会やその郊外ではできない。だがこれにしたって往復の電車や車の運転で、家に着くころは効果なんか失せていて最早疲れのみだ。さらに特定の地域を理解したいなら、一定期間（最低1月）は住んでみないとダメだ。これは言い換えると、「1月間行って住むだけの価値がある程でないとそもそもその地方に行く価値がない」と言うことだ。そんな地方は思いつかないが。

私もウォーキング等で、日帰りではあるが静岡県とか栃木県とか山梨県等の中小地域を歩いたことがある。そしてそれぞれの地方に、その特色と面白さがあることは認める。それにもかかわらずそれらの地域に、住みたいとかもう一度行きたいと言うほどの吸引力は感じない。せいぜいテレビで見る程度で十分だ。

結局地方創成の掛け声は、「地元や国を愛する心を養おう」と言うことがその大元にある。これは確かに今までは戦後の反動で、おろそかにされたことだ。だがやりすぎると戦前の家制度の復活や自由排除につながる、危険要素を孕んでいる。これらの危険から目をそらす巧妙な政策と言うのが地方創成の実態で、「裏があるからこそ変に見えにくい」ものであると注意深く見るべきだ。

16、エレガント信仰

エレガント、美しいとかスマートとか格好良いと言った語感の言葉だ。効率的で無駄がないとも捉えられる、あるいはシンプルと言うニュアンスもある。いずれにしても誉め言葉である。我々も日常の判断や行動において、無意識的にエレガントを考慮している。

目的地に行くのに意味もなく遠回りする人は居ないだろう。また身なりについても可能な範囲で恥ずかしくないようにと心がけている。同じ値段ならうまいものを食いたいし、できれば楽をして生活費を稼ぎたい。趣味であっても納得できるやり方でやりたい。みんなエレガントの問題である。

美とは一見無関係に見える数理科学でも、エレガントは極めて重要な項目だ。同じことの証明でもゴリゴリ力づくでやる(エレファント)よりもちょっと補助線とか補助量を導入したら数行で解けてしまう方が遥かにエレガントだ。これは数学ではよくある手品であって、感嘆の対象であり地あたまの良さの尺度でもある。

加えて数理科学の分野では、「真実の定理や法則はエレガントなほど真実だ」と言う、経験に根付いた深い体験の積み重ねがある。例えば力学でも電磁気学でもその行き着いた基本式は、対称性が高くてエレガントである。これほどにエレガントは人の、特に数理科学の絶対的な基準である。

もちろんエレガントは美のご本家である美術や芸術でも重要だ、いや重要であった。例えばバッハの音楽は対称性に満ちているし、ルノワールの絵画も均整がとれている。ダビンチやミケランジェロの彫刻に至っては黄金比まで考慮に入れてある。

ところが芸術がこうエレガント一色に満ちてしまうと、これに限界を感じて窒息しそうになり、もっと別の方向を探そうという機運が現れた。実験の根拠や証明が必須の科学では自由度がなさ過ぎて簡単にはいかないが、何でもありでむしろ非日常の方が歓迎される美術の分野では、結構自由にこの脱エレガント現象が起こった。

エレガントと対称性のぶち壊しで時代を画したのは、世界的にはピカソやカンディンスキー、日本で言えば岡本太郎であろう。これらの先達たちにはエレガントはおろか、その基礎となっていて我々が生まれた時から強制され返って気付かない「3次元空間」ですら足かせであって、なんとか空間をぶち壊して突き抜けようともがいた結果、あれらの奇抜な絵や彫刻になった。

彼らはあえて現代社会の免罪符である情報や理性を捨てて、赤瀬川源平式に言えば「才能しかない人々」になろうとしたのである。そして今では芸術はこの先達たちよりもさらに長足の進歩を遂げている。多くの無名の芸術家たちによって、「ピカソや岡本でさえ古い」と思わせるほどになっている。文学で言えば、「もはや夏目や芥川の時代でなくて多数の新人の多様で気の利いた作品の洪水の時代」である。

その大きな原動力が、エレガンスとの決別であった。あえて醜いものあるいはあえてありふれたものや無駄だらけのものに、新たな美を見出そうとしている。それらには実験的な側面もあってすべてが歴史の淘汰に打ち勝つことはないだろうが、必ず一定の新次元的な新境地を人類に残していくであろう。

こうして半世紀か1世紀の間に大改革を遂げた美術や芸術を鏡にすると、科学や特に数理科学は、私のような門外漢はもちろんのこと専門家同士でも隣人のやっていることは理解が難しいと言われるほどに大進歩しているものの、いまだにエレガント信仰に沈溺しているという意味ではバラエティーがない、つまりワンパターンに見える。

エレガントは大事だし、「エレガントがあつての非エレガント」と言う見方も出来るだろうが、今の数理科学はいまだにドガやルノワールのような、写真技術が進歩すればもうそちらに譲っても良いような基礎過ぎて古色蒼然としたところに、必死にしがみつこうと意味なく意固地を張っているように見える。

端的に言えばエレガントでない現実的な問題には一切関わらないか、問題を超改変して強引にエレガントの世界に引き込まないと気が済まないのだ。「芥川龍之介が今芥川賞に応募しても候補にすら残らない」と言われているが、その世界を地でやっている。

私が具体的にイメージしている「エレガントのぶち壊し」の方向とは例えば、①議論が発散してしまつて収拾がつかなくなるような問題にあえて正面からチャレンジするとか、

②結果がきたな過ぎて見るに堪えない問題を前向きに論文掲載するとか、③厳密な議論を拒否して隙間がどうしてもぬぐえない問題にアタックする等である。

振り返ってみると今までに証明されたどんなエレガントな定理や証明法も大元に帰れば、①平面あるいは線形と言う極めて高い対称性と平等性と、②数字と言う極めて理想化された単列の順序列、という2つの「超対称性」を前提とした時点で、すでに内在され約束された定理であり問題である。さもなければ証明されるわけがない。

そして私の「エレガントをぶち壊そう」という提案も、平面や数字とかそう言うきれいすぎる前提を取っ払って、もっと泥まみれになった方がその上により豊かに蓮の花が咲いてくれるのではないかと言う、素朴な見通しに立っている。美術や芸術の発展がそう教えてくれているのだ。

卑近な例を挙げれば合同や相似、これらは平面から円環（トーラス）の表面に移行しただけでもはや意味がない。円や三角形の定理も楕円や四角形になるともはや意味がない。あるいは四元数にはもはや複素数のコーシーの公式相当がないのだから正直に「残念だけどない」と公言すれば良いものを、格好をつけて黙って通り過ぎている。ネタのある見え透いた手品だ。

これらの例を逆から見えていくと、「芸術や文学は平面や数字の超対称性で予定されていないから当然に数理科学では表現できない」と言う限界の証明になる。もしこれら芸術や文学の端の方でも取り込めたら、数理科学もはるかに豊かになるだろう。小説の方だって端的に表現できて読みやすくなると思うのだ。

もう少し技術に近ところから例を挙げるなら、紙漉き技術と言う職人技に新数理を見出すとか、最近流行りの折紙数理に留まらずに伸び縮みの自由度もある絞り染めの新数理を見出すとかそう言ったところはどうだろう。先日の「結び目の無限」の記事も、その始まりとして書いてみたものだ。

17、次長課長問題

「次長課長」という芸名のお笑いコンビが居た。今も居ると思う。芸歴も結構長くてそろそろ中堅から大物クラスに移ろうと言うあたりだった。だがこのコンビの一人で主としてボケ担当だった河本準一が4年ほど前に、自分は売れっ子で年に何千万円も稼いでいたのに実母には生活保護を受給させていて、これが週刊誌沙汰になってからは露出度が大きく減った。

先に押さえておくと、河本の行為は法律違反でも不正受給でも何でも無い。母親は現に生活保護の受給資格を満たしていた。居住自治体から事前の警告なり肩代わり依頼も、受けていなかった。ところが人々はこれで収まらない。生活保護費は税金から出る。回りまわって自分を取り上げられた金だ。「俺たちの金でちゃっかり親孝行をしておいて、偉そうに出てくるな」と言うことになった。

これに対して河本は辞めておけばよいのに、「芸人は人気があればあつという間にド貧民で、収入がたまたま多いのも今だけだ」と反論した。そしてその後さらに、母親に相談されたところ「もらえるものはもらっておけ」とさも「納税者の気持ちを逆なでする発言をしていた」ことが伝わって、ほぼ完全に干された。

河本の言い訳も確かに一理ある。レーザーラモンとかヒロシとかエドハルミとか、場合によっては半年前には大うけだったピコ太郎だって、そろそろ忘れられ始めている。この業界は会社員と正反対で、「安泰」とか「鉄の椅子」とかが全くない。「かつては引っ張りだこだった人が今は田舎のキャバレーでどさ回り」などと言う例は、山ほどある。

ところがこの一連の推移を聞いて一般視聴者は、この一件以来河本がどんなに面白いことを言おうが全く笑えなくなってしまった。もっとはっきり言うと彼の存在そのものが不愉快で、とにかく見たくないし消えて欲しいという気持ちになってしまったのだ。

しかもその気持ちは事件から4年たった今も、風化していないし変わっていない。多くの人が同じ気持ちだからこのコンビも出番がないのだろう。みみっちく都税で遊んだ舩添元知事も同様だ。強姦魔の上に札幌無罪買いの高畑淳子など、もう言わずもがなだ。

特に近年日本の経済は右肩下がりで、年収は下がる一方で、貧富の差は拡大している。他方で税金や税率は、消費税から明らかなように増える一方だ。戦後の高度成長期に比べて、納税者の権利意識は格段に高くなっている。

この正義感とは若干違った、「自分だけ損をしている」とか「体よく上前をピンハネされている」とか「あいつだけちゃっかりやりやがって」と言った感情が、これまでの歴史にない程に日本人に浸透し定着している。自由と平等をあざ笑うかのようなズルや抜け駆けは、もう法律の有無にかかわらず禁忌と言ってよい。

ただこの問題は同時に、別の難しい問題を含んでいることにも注意して欲しい。もし河本が親を生活保護にすら入れずに単に放置してあったのであれば、人々は彼らに納得しただろうか。河本たちは今でも出番があったのだろうか。

「俺の金を返せ」という要素はなくなるだろうが、その代わりに「身銭を切っても自分は泥をすすってでも親を大切にしろ」と言うことになるのではないか。そうすると今度は憲法の改正自民党案にあるように、「家族は助け合わなければならない」という主張になってしまう。つまり体よく戦前の家制度、家族連帯責任制の復活の言い訳に使われてしまう恐れがあるのだ。

誰にでも親戚に、ニートや遊び人の一人くらい居るだろう。あなたの汗水たらして稼いだ貯金が彼ら遊び人たちに、「助け合い」という理由で強奪されるとしたら頭に来ないだろうか。これはこれで逆向きの不平等であり、同じく不当な割食いではないだろうか。ところがなぜか日本人は親戚感情の方が優先されていて、河本事件のこちらの面についての危機感は鈍い。

日本人は戦後に権利意識が高まった割に、親族意識が依然として残っている。たとえ理不尽でも「親兄弟の言うことや面倒を無視すると村八分になる」という、矛盾した精神構造を平気で残している。米国等のように「その件は親兄弟のことであって自分のことでないから関係ない」と言う言い訳が、通りにくい。

実際に元アナウンサーで評論家の下重暁子さんが「家族と言う病」と題する本を出して、親の言いつけを全部は聞いていないことを公にしたことがある。これに対する人々のコメントの多くは、「この親不孝者！」だった。また秋葉原事件の犯人の加藤受刑囚の一家も、離散した上に弟は自殺に追いやられている。

ではさらに進んでもしこの母親が、自分の息子にたかるためにこのネタを自ら週刊誌に持ち込んだのだとしたら、一般の反応はどうなっていたら。それでもやはり、「親にそこまでさせる息子の方が悪い」となるのではないか。ここまで行ったら子供は永遠に親の奴隷である。儒教の毒が日本人の心の底にこびりついて、どうしても外れない。

もちろん世の親の多くは、そんなことをしない良い親だ。だが決して全員ではない。そしてそうでない家族にまで自分流の「親の恩」を押し付ける、ここに日本人の怖さがある。最近に芥川賞作品である村田沙耶香さんの「コンビニ」を読んでも思ったのだが、無知の正義感の押し付け程面倒なものはない。

次長課長が復活しないのは別に構わないが、「あれが親不孝者の末路だ」とすり替えられるとこれは危ない。

18、平家物語

天才的人形作家の川本喜八郎の代表的人形図鑑と言え、**「新・平家物語・人形絵巻」**だ。この本の解説で作家の高橋克彦さんは、「主人公は源氏なのに題名が平家物語はおかしい」と疑問を呈している。高橋さんは**「炎（ほむら）立つ」**や**「北の耀星（ようせい）アテルイ」**等、この時代の東北を舞台にした小説の第一人者である。

だが愚考するに、主人公はあくまでも滅びゆく平家で良いと思う。平家物語は実は巻頭の、「祇園精舎の鐘の声～風の前の塵に同じ」で一旦完結していると私は見る。そしてそれ以降の長編は、このキャッチフレーズのあくまでも具体的な展開と言う位置づけだ。そして平家の何十人もの登場人物たちはタイプこそ実に多様であるものの、皆揃って武士でありながら雅人である。

しかも平家の人々はその雅のまま滅んでいく。ここで「雅とはすなわち滅び」なのである。この美学の前には、源氏の武勇も勝利も色あせるのだ。だからこの物語の主題は「雅の滅び」であり、もちろん物語自体では源氏も同じほど活躍をするが、題名としてはやはり「平家物語」なのだと思う。

この物語で、清盛の長男であり優秀であった重盛は早世する。そして平家の棟梁の地位は重盛の子の維盛等でなく、重盛の弟であった宗盛が掌握していく。宗盛に特段の優れた武勇や人望があったわけではない。むしろ壇ノ浦での往生際の悪さを見れば分かるように臆病な人間で、宗主権もかすめ取った感じだ。そしてこの宗盛の凡庸さと臆病さが、平家が早々に弱体化しかつ土壇場でも踏ん張れずに滅びた主因であると見る。

つまり平宗盛とは、「凡庸な人物」と言うよりも「小ずるい人物」なのだ。わざと嫡子の維盛を戦場に送って敗退させたが、心の中では討ち死にを願っていたことだろう。そして敗退を理由にこじつけて、長子の権利を奪い取った。器が小さく潔くない人物が多い現代でも、こう言うことは良くある。小物だからと言って、欲や悪知恵は一人前以上にあるのだ。どさくさに紛れて親戚の遺産をくすねる奴、こういう人物は多くどこにでも居るだろう。

ただ宗盛を除くと忠度とか敦盛とか知盛とか、ほとんどの平家武士が最後は意外と潔い。その意味で平家と言っても清盛の遺伝子や武士道は結構維持されていたと言える。その意味でも惣領が宗盛だったのは、いかにも残念なことである。

さて平家がのし上がったのを一言で言うと、現実には武士が実力を持ちながら世は依然として貴族政治の旧弊のままであったことに対する、一種の革命による正常化であった。革命過程は具体的には、保元の乱と平治の乱である。その意味でこの主役交代は順当な歴史推移であり、かつそれまでの閉塞した貴族政治を武力打破する、いわばマルクスの歴史観の実現であった。

平氏も源氏も武士風情とか地下人とか言われながらも、「数代遡れば天皇に行き着く」という一種の内心の自負と言うか世の矛盾の気持ちは持っていたことだろう。そしてこうして順当に入れ替わったものの、惜しいことに平家は藤原氏と似た宮廷栄華にあこがれかつこれを実践してしまった。つまり革命としては不徹底だったわけだ。そしてこの不徹底によって自らも滅んだ。

話は戻るが、その平家討伐に最初に立ち上がったのが木曾義仲であった。以前にも指摘したが、平家物語はその精神や構成や登場人物において、千年前の三国志と似たところがある。この例えに従えば山奥育ちだった義仲は、蜀の劉備玄徳に当たるだろう。

そして劉備が必ずしも義仲のように中央知らず政治知らずの武骨な田舎者でなかったことを思えば、義仲が無知だったのを田舎育ちの必然とすることは無理があるのではないかと思える。彼の育ち方や育て方によっては、木曾幕府が開かれていたかもしれない。

たしかに木曾は谷あいの不毛な地であるが、頼朝が敢えて鎌倉を選んだのも四方を海と山に囲まれて攻略しにくかったためで、これらの条件は同等である。あえて問題を挙げるなら木曾の雪か。いずれが開幕するにしてもここも再び肝要なのは、京の公家衆にあこがれずに新時代にふさわしい一線を引くことであった。

実際に平家に次いで登場した源氏は、平家の失態に学習して武士に徹した。だが武力で成り上がった者に特有の内輪争いは避けられずに、わずか3代で滅んで北条氏が実権を握る。そして北条の時代が150年続いたが、だからと言って武士特有の内輪争いの悪弊が外れた訳ではない。

北条氏はかつての同志であり姻戚関係もあった比企氏、畠山氏、和田氏、梶原氏等を滅ぼした。さらに時代が下っても、三浦氏や安達氏等の有力御家人を滅ぼした。蒙古襲来撃退で有名な7代執権時宗ですら、異母兄の時輔及び一族の名越北条氏を滅亡させている。北条氏の場合は皮肉と言うか幸いと言うか、「誰もいなくなる」前に新田や足利に敗れるに至っただけのことである。

ところで平家物語（厳密には吾妻鏡）で、静御前が頼朝の前で義経を慕う舞を踊った有名な下りがある。この時に頼朝が怒って静を切ろうとすると政子が、「女心とはそのようなものだ」と諫める場面がある。あの男勝りで政略家の政子がこのセリフかと思うと、これは奥の深いなかなか心憎い演出である。平家物語にはこういった心憎い演出が数多く、やはり世界に誇る文学と言えるだろう。

なお、北条氏以降の日本における歴史の必然と幸運については、後日に記載することにする。

19、素朴な疑問と意外な気づき

法律は犯さず他人に迷惑をかけずルールや言いつけはきちんと守り、あてがわれたエネルギーのみを使用した上で人畜無害に死んでいく。まあこれが一番求められている、正しい生き方だ。

他人に迷惑をかけることや人の仕事を意味なく増やすことは、大発見を100個してもなお許されないほどに、とんでもなく悪いことだ。あなたは会社等で自分の時間を供出して、仕事をして価値を生み出している。でもその代わりに専門でない分野に関しては、それぞれの分野の人が分担して創造し、その価値をもらって生きている。だからお互い様、プラマイゼロだ。

以上の主張は当然に善であり真だが、どこかつまらなくないか。第一に生産と消費がお互い様でプラマイゼロだと言うのなら、それら「全員がまとめて居なくなっても誰も困らないし世の中何も変わらない」と言うことではないか。内輪で買い合うだけの、場末の寂れた商店街みたいなものだ。

もちろん人畜無害と何もできないのは違う。どの人にも晩酌の1合くらいあるし、趣味のパチンコだって程ほどにならして良い。つまり許容範囲内なら選択の権利はあるのだ。その代りに仕事では黒子になってもらわないと、トータルとしては迷惑だ。例えば

区役所に住民票を取りに行ったら「そんなことよりスピノザの哲学について議論しよう」などと言われても、高尚かもしれないが迷惑ないのだ。

私は大学での勉強が嫌で仕方なかった。どの学問にしても結局は大工が金槌の叩き方を習うようなもので、人格や人生の何の養成にもならない。ひたすら飯の種の為だけにつまらない実習をすとか技を磨くが、その結果は社会の部品になるのが関の山である。もっとも級友の多くは何の疑問も持たずに、従順にやっていたが。

引き続く会社員生活も、つまらないことこの上なかった。本当に部品になっちまったし、40年も休まずに働き続けられないといけなし、経営層や上司に加えて組合もうるさいし、単に「つぶし合っている」としか思えなかった。しかも辞令一つでクソ田舎に行かされる。

でも周りの人々を見ると、多少の文句を言いつつもそれなりにやっている。どうも皆さん、私ほどには奴隷が嫌でないみたいだ。中には「会社に来ないと時間がつぶせない」などと本気でのたまう御仁や、接待と称して自分が上手いものをたらふく食ってご満悦な要領の超優れた同僚社員も多かった。

寺山修司の「書を捨てて町に出よう」、この言葉が超刺激的で感動した。要するに「過去の人々の業績の墓守なんかやめて、フィールドでワイルドにやろうぜ」と言うことだ。このスローガンは、私の人生目標を一言で語っている。こんなに素敵な言葉はない。

さすがに秋葉原事件などを起こしてはいけないが、ルール無視でマナー無視、忠告無視で思惑無視。「ルールは俺様が作るのだ」みたいなエネルギーを私はこよなく愛している。道のないところに行ってみたいし、他人が思いつかないことをやってみたい。お行儀なんかクソクラエだ。

皆が右に行けば私は左に、皆が「はい」と言えば私は「フン」で、皆が良い子ちゃんをすれば私はちょい悪（ワル）。まあこんな生き方が、本来の自分に一番似合っていて座りが良い。自分のことは自分で決める、当たり前のことだがこれが鉄則だ。

とは言え「流されて生きるのが一番たやすい」ことも、私は知っている。何にでも逆らっていても、疲れるだけだ。やりたいことが1つあったら、どうでも良い残りの9個は無視して流れに任せる。隣席の奴がズルやコスをやっているも見ても見て見ぬふりをして通り過ぎる。この程度の要領は当然にやっている。

私は別に、社会善のために生きているわけではない。こういう他人事にいちいち目くじら立てるのは、むしろ油断であり隙だ。キリスト教では褒められるかもしれないが、武士道に反する。後で仕返しに嘘の告げ口や嫌がらせをされるのが、関の山だね。

目覚ましなしで朝日とともに起きて、夕日とともに寝る。その日に何をやって何を食べるかは、その日の思い付きで決める。晴れたら出かけて、雨の日は家にこもる。静かでありさえすれば、お隣様が誰であろうと勝手だ。現に彼らの苗字すら知らない。

唯一の願いは面倒なトラブルに巻き込まれないこと、特に金をむしられないことだ。余計なことに金輪際関わらない。でもそのおかげで、長期的には人類に貢献しているつもりだ。つまり自分の瞑想の記録であるこのブログは、ある意味で新思考方法の提案なのだ。

と言う訳で私が行きついたキーワードが、「素朴な疑問と意外な気づき」だ。日々これの為に瞑想三昧をしている。何度も断っているが私の瞑想は科学ではない。だから根拠等は一切ない。証明とか実証実験とか、手間がかかるだけで知能はたいして使わない。つまりクソつまらない。だからやらない。

専門分野もない。特定の分野に縛られたくないからだ。成果はこのブログ全部だ。これで金にもなれば嫁様にも叱られないのだが。

20、三島由紀夫の「葉隠入門」を読んだ

三島由紀夫、言うまでもなく超天才で、私のような凡人には全く理解できない。これまでに「金閣寺」とか「潮騒」とか彼の代表作に挑戦したが、ことごとく跳ね返された。強いて読み終えられたのは彼の短編戯曲くらいである。

彼が天才であるのは、彼の作品の難解さに如実に表れている。一般に人が事物、特に他人の著作を理解できない理由は大きく分けて、①体験が違いすぎてその微妙な境地に感情移入できない、②論理が凡人には飛躍しすぎていてトレースできない、の2つのパターンがある。そして私にとって三島は、おそらくこの両方である。

さらに彼の人生の閉じ方、これもおよそ常人では理解できない。自衛隊に押し入って決起の檄を飛ばし、これが受け入れられないと見るや割腹自殺をするという行為である。決起の激は二二六事件の青年将校団を想起させ、また自殺と言う形式が彼独特の美学の完成であることは、私にもなんとなく分かる。

その究極の武士道本の「葉隠」(はがくれ)の、三島による解説書を読んでみた。三島の美学に武士道の影は大きい。「三島による葉隠の解説」は事実上、「葉隠による三島の解説」になっているだろうと予想したからである。読んだ感想は一言で言うと、本当に入門であって意外と読みやすいということである。

三島がこの解説書を描いたのは昭和42年である。翌年には民兵組織の「縦の会」を組織しさらにその2年後には割腹自殺事件を起こしているから、この本を書いた時には彼の思想はほぼ完成していただろう。三島やこの本についてはすでにウィキペディア等で膨大な解説がなされているので、このブログ記事では無知な私の感想に留めたい。

葉隠はもちろん武士道について解説したものだ。ここで武士道とは、「仏教や儒教や神道に立脚しつつもこれらに留まらないもの」だと言う。もし留まるならばそれは単に「小さなイデオロギー」、つまり机上の理想論になってしまうからだ。武士道とはもっと深い、実践的な生き方なのだ。

そしてその神髄は良く知られているように、「死んで生きる」ことである。ここで注意すべきは、「単に死ね」と言っているわけではない点だ。著者の山本常朝がその後に続けて、「生きるときは楽しく生きよ」と言っている。この部分を三島は「エピクロスの要素」(善なる快樂)と表現し、さらに全体を「リアリズムとニヒリズムの心地よい混交」と評している。

著者の山本自身も、尊敬していた主君(鍋島公)の死に殉じて殉死しようとしたところを、禁止令が出て果たせずにやむなく出家隠遁して僧として床の上で病死した人物である。死にきれずに無念の内に僧になったが、その彼のある意味遺言と言ってよい。もっとも彼は後世に残す気はなかったようだ。

内容は一見して矛盾のてんこ盛りである。だが真の油断のない生き方を提示している以上は、矛盾はない方がおかしい。ただ残念なことは武士道実践の目標を依然として、「忠と孝」に置いているところだ。これを「真の自由」に置き換えれば、その教えは現代にも通用する。具体的には「死ね、だが粹に生きろ」とか、「もっともらしい理屈を信じるな、危うい」とかである。

中庸が大切だが、エネルギーはむしろ過大すぎるほどが良い。但しその勢いは見えてはならず、何気に染み出てくる方が高い。無口は重みであり、落ち着きがないのは

軽みである。平常時から緊急時を想定しておくのが良い。いつ死んでも良い覚悟をしながら、犬死は軽拳である。常に緊張しつつも、同時に楽しむ。周りにも自分にも隙を与えない。

刀は普段はさやに収め、ここぞというときに抜け。人のあざけりは無視するのが良いが、場合によっては敵がますます増長して無意味な要求すらしてきたりする。こんな風が見えた時は、直ちに一喝して断交すべきである。押しの強い相手にはまず押させておいて、一息したところで上回る理屈で一声によってとどめを刺す。

好人物はダメだ、強すぎるほどで良い。上司の性格を読んだうえで、部下を務める。鋭い上司には一目置けることを知らせ、明るい上司にはその隙を補える者だと気づかせる。成就のコツは、高慢と反省の組み合わせだ。日々の一念の積み重ねが重い。病気になってから養生しようとしても遅い。油断をすれば病気になるのは当たり前で、未病の内に原因を除去すべし。

事故に遭ったら、正面突破よりも発想の転換だ。人生は短いので楽しいことをすべきだ、ただしこの言葉は思慮の浅い人には返って害だ。威厳はわざと作るものでなくて、成熟した中身がほとばしるものである。招かれてもいないところに、わざわざ出かけるな。

義とか不義を超えたところに、真理はある。条理などは小さなものだ。慢心も卑下も良くない。一度も過ちをしたこともない人は、危ない。仇討ちや喧嘩は、中途半端で辞めるのが最下策だ。固定観念が諸悪の根源だ。修行は一生ものだが、死ぬときは死ぬ。ケチと儉約は似て見えるが全く逆である、特に心根が真逆だ。

一見礼儀正しいが実は律儀でない人が多い。雨の時は、「濡れるくらいで当たり前」と言う心持ちが基本だ。武芸では、中庸よりも上位にある方が良い。浅はかな親は子もダメにする。「一芸に堪能」は武士ではない。芸に頼ると浅くなる。弱音を吐くと付け入られる。名誉と富に執着がない者も、逆説的だがたいした者にならない。天地自然の道理が最高に大切だ。

葉隠の時代はちょうど元禄のころで、武士道が廃れて若者が華美とぜいたくに溺れ始めたころである。三島が生きかつ嘆いた昭和後期は「昭和元禄」と言われたほどで、時代背景も似ている。ここにも三島が葉隠を愛読する理由があった。この時代は学生運動が盛り上がった時代であったが、三島はこれに共鳴賛同していない。学位運動は単にイデオロギーであり流行であって、武士道とは程遠いと見ている。

さてここで三島らしい解釈だが、「自ら選んだ死と強制された死の区別はない」そうだ。選抜された特攻隊員と言っても、これに正面から慄然と対峙するときは、選択性のある「油断のない立派な死」である。その時の緊張こそ人生で最も尊い。

さらに三島は論を重ねて、「全く強制された意に反する死とかましてや犬死にと言うものはない」と断定している。死の意味は多くの場合後世の評価により変わるものであって、断定できる死などないのが理由だそうだ。結論として、「生を重んじるのと死を重んじるのは同一の事の裏表」と言っている。

21、法華経は危険思想か

妙法蓮華経（サツダルマ・プンダリカ・フリダーヤ・スートラ）、略して法華経だ。信者に日蓮上人とか北一輝とか井上日召とか大川周明とか田中智学とか、一連の極端に走る人が多いと言い。この事実はこの御経にそもそも、人を極端にさせる要因があるのか疑ってしまう。

この点についてつらつら考えるに、法華経は天台宗でも重要な御経だがこちらは先鋭化していない。したがって多分に読み方にも依ると言うことだろう。ちなみに法華経の成立は紀元後100年ころで、鳩摩羅什（くまらじゅう）の訳で流布したのは紀元後300年ころだと言われている。

つまり成立の時点で、仏教の開祖である釈迦の入滅後優に500年は経っている。今から500年前と言えば織田信長が生まれたころである。明らかに仏陀の直筆や遺言ではない。このことを理由に、法華経を「偽書だ」と言う人も居る。また逆に、「大乘仏教の最高集大成である」とほめちぎる人も居る。

法華経は膨大過ぎて、また宗教は一般に解釈が多様なので、私のような門外漢が安易に理解し議論できるものではない。ある意味一生かかっても理解しきれないものである。ただ思うに、この最高集大成であるという位置づけを逆に取って、「それ以前の御経は皆不完全だ」とか「法華経信仰以外は皆邪宗である」と叫ぶ人が出るようだ。「従来の邪宗信仰のために日本に国難が訪れる」と、解釈する人が出る傾向にある。

日蓮や北らに共通して見られるのは、①今は困難な時代である、②これは旧来の劣った邪宗信仰のせいである、③法華経を正しく信じることにより困難が取り除かれて

本当の正しい時代がやって来ると言う思想である。これはスタートの「困難な時代」から始まって多分に思い込みで、それ以上の深い根拠はない。

ちなみに北は、お題目を唱えながらの神降ろしの技も使えたという。こういった要素もあるが、思い込みとは言いながら多くの同調者や崇拝者が出たと言うことは、やはり単なる個人の思い込みを超えた普遍的真実性が、根本である法華經にあるということになる。

ちなみに、日蓮の場合の末世とは先ず飢饉次いで蒙古来襲であり、北にとっては二二六こそがしかるべき時代への法華經革命であった。やはり極端な日蓮宗系の国柱会のメンバーであった石原莞爾は満州国設立と対米戦勝利を法華經革命と考えていたようだ。

このように思想のパターンは似ていても、「何が来襲か」の当てはめは時代ごとあるいは人によって異なっている。ただしどの時代にも当てはめようとすれば当てはまる何らかの事実が必ず見つかると思うところが、先に言及した「人類共通の要因」かもしれない。

一般にどの宗教においても開祖と中興の祖が居た場合に、公式見解としては開祖優先ではあるものの実践的には中興の祖優先であるのが通例である。だから日蓮宗系が本来融和的な仏陀と性格的にかなり異なって、日蓮の極端な性格の方を引いてしまうのはある意味仕方ないことである。

だがこれがあまり極端になると、キリスト教等の一神教の異端審問による殺し合いと何ら異ならなくなってしまう。日蓮や北の思想もその極端さが何気に、共産主義革命と似てはいないか。それまでの秩序や為政を、暴力によって全く改変しようと言うのである。本来がアニミズム神道を愛する私としては、日本の仏教も理屈の云々以前にまず融和的であって欲しいと思っている。

ところで宗教は特に、「どこまでも深く掘り起こせる根拠列とか根本理由」と言ったものはない。あってもせいぜい2～3層だ。しかもそれらは根拠と言うよりもむしろ、「信じるきっかけ」といった類の事項である。法華經での日蓮や北も他の一般信者も、行為の本質は「信じる」という個々人の選択にあるのであって、根拠とか証明等は仮にあっても実態はきっかけに過ぎない。

似たところで平田篤胤流の神道至高思想、これは「他の国の神々は八百万の神から教示されたものを伝えただけに過ぎない」という思想だ。明らかに荒唐無稽であり、彼が直感的に感得したにすぎずそれ以上の根拠はない。それにもかかわらず勤王思想として日本を席卷したほどで、その意味で多くの人が信じた。

そして欧米列強に打ち負かされて初めて、それが単なる思い付きに過ぎない非現実的な発想であることが明らかになった。それでもなお信じ続けた人も居て、大東亜戦争まで神国思想として続いた。仏教もキリスト教も信仰とは結局は「偉い人が言った」とか「聖典にそう書いてある」とか「自分も同じ気持ちになった」程度が根拠であって、それ以上深い根拠はない。

そして科学技術だって実は、程度の差はあれ同様である。論理証明や実験根拠も所詮は信じるきっかけであって、キリスト教が嫌いな人が居るのと同様に科学技術を信じないのもその人の自由だ。仮にある人が重力の存在を信じなくても穴には落ちるが、穴に落ちてもお信じないというのなら、それはその人の勝手である。

またニュートン力学しか信じられない人には、相対論や量子論は気違い沙汰に見えるだろうが、それもその人の自己責任の範囲であり、自由である。結局物事は理屈とか根拠等とか言っても最終的には信じるか否かと言う、多分に「肌が合う・合わない」を基本とした、個人的な決定に過ぎないという事実を知っておくことは、決して無益でない。

22、夢と解釈(その15)

<夢1>道を歩いていたらアンケートを頼まれたので、やってやったら食事券をもらった。そこでさっそくレストランに入って食事したら、またサービス券をもらった。そこでその券で喫茶店に入ったら、再々度食事券をもらった。どうもこの延々の繰り返しのようだ。もう一生お金の心配をしなくて良いみたいだ。やったー！

<解釈1>最近確かにグルメ券をもらいましたが、依然としてお金の心配はしていません。

<夢2>銭形平次が何か、江戸時代の捕り物番組の撮影をしている。だがなぜか背景はセットでなくて、本物の現在の銀座や日本橋だ。そしてちょうどお中元のシーズンなので売り出し物なども紹介して、まるでご当地番組になっている。それでもたまにチョンマゲと着物の侍とかも歩いて行くので、どうもそう言う趣向のふざけた番組作りのようだ。いずれにしてもどうも良く分からない。

<解釈2>最近タイムスリップものの小説を読んでいたの、その影響ですかね。

<夢3>映画館に行って切符を買ったのだが、うっかり自分で半券を切ってしまった。焦って係りのお姉さんに事情を話すと、「原則としてその切符はもう使えないのですが…」と言い始める。「原則として」と言うことは「今回だけ例外的に映画を見せてくれるのかな」と期待したら、「やっぱりだめです」とにべもなく断られて途方に暮れた。

<解釈3>ドジな夢を見ることがなぜか多いです。しかも極めてみみっちいの。

<夢4>冷蔵庫を新調したのだが、戸を開けるとその拍子に中の仕切り網が外れて中の冷蔵品がぐじゃぐじゃに落ちてしまう。しかも網を何回直してもそうになって、いつもやり直しになってしまう。もうこの仕事に嫌になった私は、嫁様が開ける番になるのを待った。ところが嫁様が開けると網が崩れない。治ったのかと思って私が開けてみたら、また崩れた。

<解釈4>こういうシシューフォスの神話みたいなのが大嫌いな私です。でもこういうことは、嫌いな人になぜかお鉢が回ってくる…。

<夢5>会社に付属の図書館と緊急車両が、ある日なぜか一般開放になっていた。図書館内では近所の子供たちが本と関係なく騒ぎまわっていて、仕事にならない。緊急車も出払ってばかりで、さらに修理や世話までやらされる。いくら地元協調とは言え、一体どうなっているのだ。すべてが崩壊しているではないか。

<解釈5>私は愛社精神とかは皆無だから、別に良いのですけどね。

<夢6>近所のかかりつけの医者に行ったら、前の老人客とだらだら世間話をしている。ちなみに医者顔はどこかで見たチョイ役俳優の顔だったが、別に変に思わなかった。いずれにしてもらちが明かないので、乗り込んでいって医者に、「こら一、話を辞めて絵を描け」と言って絵の具を渡した。するとその医者は泣きながら絵を描いた。そして「どら、体を診ましょう」と言うので、「良いからいつもの薬をよこせ」と怒鳴った。すると直ちに処方箋を書いてくれた上に、玄関まで私を見送った。

<解釈6>うちの近所の医者は、頼んだ通りに薬を出して余計な世話を言わない、そういう意味で悟りを開いた名医なのですけどね。

<夢7>高視聴率番組の「笑点」の、楽屋を覗いてみた。すると桂歌丸が居たので、一緒に花魁(おいらん)が使う髪飾りの名称の当てっこをやった。私が素人の割に成績が良かったので、歌丸が評価してくれた。そしてご褒美として2人でコンビを組んで、笑点の前座で漫才をやった。

<解釈7>最近浮世絵や錦絵をよく見ているからですかね。

＜夢8＞商店街の端に住んでいた。商店街では夏祭りがあるらしくて、昼間から飾り付けが始まっている。七夕飾りとか屋台とか万国旗とかだ。これらを一通り見終わった後で、知り合いの医者に会った。その医者は最近研究で特許を取ったそうだが、とある大学の先生と連名にしたために、「2, 3言指導を受けただけなのに権利はどっと持っていかれた」と文句を言っている。

＜解釈8＞「先生丸儲け」は、どの業界でも良くある話です。ただ夏祭りとどうつながっているのかは、分かりません。

＜夢9＞会社の方針が変わって、定年が一切撤廃された。その結果子会社に永久出向したような爺さんたちが、山ほど帰ってきた。でも老人は仕事にならないので、席は若い程上席になった。爺さんたちはまとめて1席で、もう飲みかけのコーヒーを置くスペースすらない。私は隣のチームの同期と、「以前にT大学の学生が応募してきたときに入れておけばよかったな」などと話している。

＜解説9＞私も末席の「爺さん席」の方でした、念のため。

23、現代小説6作の紹介

最近に読んだ、ここ数年内に書かれた現代文学作品を6品紹介します。

1、烏（からす）に単（ひとえ）は似合わない（2012、安倍千里）

最近完結した「八咫烏（やたがらす）シリーズ」全6冊の最初の本で、松本清張賞受賞作。授賞当時作者は20歳だった（現在は26歳で早稲田の院生）。

仮想の平安時代を設定し、特にこの第1作では若宮の妃選別にしのぎを削る東西南北4摂家の姫君たちのつば競り合いを描いている。八咫烏とは記紀神話に出てくる3本足の烏のことだが、ここでは「人はすべて烏に変身できる」という設定になっている。個性ある姫君やそのおつきたちが女丸出しで当てつけ合いをする様や、絢爛豪華な衣装設定などが出てくる一方で、作者の若い感覚から出るライトノベル風の読み易いタッチも売り。二転三転した結果結局妃に選ばれたのは誰か、これはネタばらしになるのでここでは書かない。ただぼんくらと思われた当の若宮の推論と意思決定の見事さは驚くばかりで、この論理構造が松本清張賞を射止めたのだろう。

今本屋に行くと最新刊（6冊目）が平積みになっている。但し私はこの作家にもうこれ以上時間を割く気はない。

2、分かれ道ノストラダムス（2016、深緑野分）

この作者はパートの書店員から作家になった女性でまだ30代半ば。デビュー作が直木賞候補になったこともある。専門はミステリー小説。やはりライトノベル風の読みやすいタッチが売り。

主人公の日高は昔の親友だった基の葬式で祖母から渡された彼の日記を読むうちに、ある分岐点で選択が違えば基は死ななかったかもしれないというパラレルワールドを夢想し始める。そしてそれを追う過程で、ノストラダムスの世界消滅の予言を教義とする狂信的な信仰集団に遭遇し、それと対峙する羽目になる。

オカルト好きの金魚店主の久慈、若者カウンセラーの桐、謎のホームレス、日高の相棒で親友の八女、その両親たち、旧友の藤野、基の主治医だった結城等多様な登場者。一体どっちが正義でどっちが悪なのか、誰と誰がどう結びついているのか、これも二転三転する。そしてぎりぎり殺されそうになるが結局どう結末するのか、生き残れるのは誰か。これもネタばらしになるのでここでは書かない。

3、コンビニ人間（2016、村田沙耶香）

芥川賞受賞作品。この人もまだ37歳で作品のタッチも読みやすいが、純文学とまでは言わないもののライトノベルは卒業している。本人もコンビニ店員暦15年のつわものだが、この小説は彼女自身の伝記ではなく、実際彼女のこれまでの作品群は極めて多岐にわたっている。

子供のころから常識がなく空気を読めなかった主人公は、周りの人々の常識の押し付けが面倒になって、自分を出さない習慣がついたまま大人になり、就活もせずに今もコンビニ店員を続けている。コンビニ店員が続いているのはマニュアルに従えば良い、気楽な部品だからだ。でも旧友や家族からは「30代後半になって結婚もしないし彼氏もないのは尋常でない」と言われ始める。

そしてこれへの言い訳が面倒だと言う理由だけで、ダメ男と形だけの同棲を始める。条件は彼の生活費もねん出することだ。だがコンビニ店員では貯金も底をつき、男に勧められて仕方なく就活を始める。ところがその過程で立ち寄ったあるコンビニの店員のマナーや品ぞろえがまるでダメだったので注意し直しているうちに、「自分の居場所であり天職はコンビニ店員だった」と言う真理に気付き、やっと自分にポジティブになれて話は終わる。

4、牛井愛（2014、小野寺史宜）

この作者はオール読物新人賞受賞者。世代は現在50歳前後。主人公がありふれた牛井屋の店員者と言う意味では上記の「コンビニ人間」と似たところもあるが、こちらの作品は客の回転の速い牛井屋の店員や客たちが、「自分たちも知らないところでふと繋がったりすれ違ったりしている」というありそうな偶然を、うまく計算して読みやすく描いている。

店長と店員たち、恋人との再会の約束に出会えなかった男性、実はその再会場所に向かう途中に自動車事故で無くなっていた元彼女、その事故車を見つけた監視カメラ、駄目過ぎて首にした主婦店員とその娘の幼稚園児、元彼女が教諭をしていた幼稚園、食べ物に困って強盗に入った先の主婦の紐。これらの登場人物が一期一会の牛井屋を舞台にしながらも、牛井屋外で意外に繋がり合っていた。

5. 市街戦(2016、砂川文次)

文学界新人賞受賞作品。自衛隊幹部候補生の新入隊員特別訓練の行軍の苦しさを軸に、その途中途中でちょっとしたきっかけからフラッシュバックする学生時代の断片的な思い出を重ねて、トータルとしてその主人公が防衛大学校生でもなかったのになぜ自衛隊に入隊したかを回顧するように仕組まれた作品。

自衛隊の重装備での行軍特訓の過程はおよそ経験者でしか書けないほどに緻密かつリアルだ。仮にそれだけでも「そうそう体験できない特殊な世界を覗いた」かのお得感がある。ただ選評では「そのリアル感に対して過去の思い出は抽象的でアンバランスなところが難点だ」と言う指摘もあった。

6. 人生のアルバム(2016、渡辺勝也)

やはり文学界新人賞受賞作品(上記作品と同時受賞)。

100歳近くまで生きた女性が、親、夫、娘の3代を通して毎日写真を撮られてすべて整理されて保存されているという設定で、一人の人間が生まれてから老いて死ぬまでのほぼ1世紀を、その加齢とともに、撮影するカメラの進化や写真から連想される各時代の主要事件をほぼ経時的に叙述した作品で、明治末期から平成中期までの伝記的な私歴史的作品。「世の中に本当にこういう人が居ても良いのではないか」とさえ思わせる。

ただ選評ではこの作品を推さなかった委員から、「ウィキペディア的文学」と揶揄されてもいる。これら新人賞2作品は良く構成されてはいるものの、最初に紹介した4作品のようなプロとしての、読みやすさや滑らかさには今一步と言う思いも持った。

全体として、SNSや初音ミク等に代表されるこの20年のネット環境の進歩は目に見はるものがあって、たとえ文字列である文学にもこれらの新文化、つまり漫画やアニメやコミケと言った良い意味でのサブカルチャーの影響は見られ、しかも世代ごとに毎年新しくなっている。

私はこの傾向を好ましいと前向きに捉えている。言い換えれば学校の先生が推薦する「夏目と芥川」と言った100年前の純文学などもはや無意味で読む価値もないと、ますます確信した。

24、東芝の轟沈：ヤクザな時代の始まり

もうかなり前になるが、人生相談コーナーに次のような質問が載っていた：

Q：会社員ですが毎日つまらないので翻訳業に転向したいと思いますが、どうでしょうか？

これに対して現在実際に翻訳事務所員だという方から、次のような回答が寄せられていた：

A：せっかく会社員と言う安定してステータスがあるのに、どれだけ外国語が得意なのか知りませんが、わざわざ翻訳などと言うヤクザな世界に入ろうなんて、愚かの限りです。先日も所長が仕事を取ってきて、ルーマニア語の翻訳をやらせされました。「スペイン語と同じヨーロッパ語だからできるはずだ」と言うのが理由でした。辞書や教科書を買ってにわか勉強でやっつけましたが、品質は保証できませんし、歩合制なので苦労に見合った賃金ももらっていません。日々こんな風で良かったら転職は自由ですが、できれば私と仕事を交換してもらえませんか。

大学卒なら英語はおろか、第二外国語までやらされたはずだ。得意な人には、返って面白かったかもしれない。何よりも頭脳を使う、典型的な知的集約業務だ。だが古今東西、知的だとか習得に熟練が居ると言うことと、収入の安定性やステータスの高さは、微妙に別物なのだ。例えばチンドン屋だって差別用語だけれど、ちゃんとやるには結構な練習と技術を必要とする。

翻訳と言うと普通は文学作品とか学術書を連想するだろうが、翻訳事務所に来る仕事のほとんどは、契約文書とか特許の明細書とか掃除機の使い方と言ったつまらないものばかりだ。会社員の方が安定と言う最重要項目がほぼ保証されていて、「仕事が判で押したようだ」などと言うことはほとんどどうでも良いことなのだ。

先日東芝が3度目の正直で、決算書を出してきた。聞いたことのない弱小監査法人の「重大な保留付きの適正」と言う、かなり裏がありそうな「保証」付きだ。それでも約1兆円の赤字で、上場廃止はほぼ間違いない。それどころか政府の税金によるテコ入れがなければ、倒産まっしぐらだ。いよいよ不沈空母東芝の轟沈・敗戦が目に見えてきた。

まあ安倍首相も頭が痛いだらう。いくら民間セクターの一事象とはいえ、一発で失業者が20万人と言うことなら、雇用政策上何らかの助け舟を出さない訳にはいかない。

だが「20万人全員救済で、責任は現経営陣の退陣程度」では、今度は国民が黙っていない。結局切り分けて、おいしいところだけどこかが持っていく形だろう。

不沈空母の轟沈、それも70年前の敗戦を再演したかのような純日本的な敗戦の仕方は、一体何を象徴しているのだろうか。答えればそれは、終身雇用制度の終焉である。「寄るなら大樹の陰で、入ってしまえばあとは安心」と言う安直が、完全に過去のものとなったという引導だ。天下の大東芝さえ沈んで無くなるのだから。

特に一流大卒のいわゆるエリートと言われた層には、これは痛い話だ。ノンエリートならこれまでも、店がつぶれたとか就職先が退職金も出ない零細企業だったなどと言うことは結構あることなのだが、寝耳に水なのはむしろエリート層だろう。学生の頃バカにしていた、田舎の中小の経営者になった元同級生に、頭を下げて泣きつくこともありうることになった。

先日やはり王手のNECが、「車載電池の開発を中止する」と発表した。理由はうまく開発できないからではなくて、開発できたとしても売り込み先のめどが立たないからだという。まあ東芝の轍を踏まずに傷が浅いうちに撤退しようと学習したのであろうが、担当した多数の開発技術者たちはどうなってしまうのだろうか。今更新分野の学習しなおしができるほどに、今の技術分野はハードルが低くない。

また東芝の轟沈にも言わば他山の石として、関係のない一般人にも学ぶべき人生教訓はある。一言で言うと「日々精進」とか「一所懸命」とか「努力と辛抱」などと言った浪花節的人生観は、もう過去のものだということだ。どれだけ毎日爪の垢をとんでも、つまらない約束一発であつという間に転落して生活保護なのだ。特に友人や親せきの泣きつきには要注意である。

いずれにしても今、世界の経済情勢の変化や後進国の追い上げやIT環境の進歩等によって、人生のもって行き方が年々大きく地殻変動をしている。会社の方が終身雇用ほど長生きしないだろうし、特にいわゆる知的産業を中心に人材のヤクザ化が進むだろう。

例えばやはり知的な報道業界だ。週刊誌やタブロイド紙はすでに「記事は一匹オオカミから買う」時代であるが、大手の新聞や放送も早晚そうなる。世の中の進歩が速すぎて10年前のセンスではもはや売れなくなり、「社内記者を一生かけて養う」などと言うことが非効率でやっていられなくなるのだ。必然的にこれまでの記者は、一匹狼の「記事屋」になるしかない。

研究開発職も同様だ。10年たつともはや課題や技術がまるで違っているこの時代に、「技術者一生丸抱え」と言う時代は早晩消滅して、ほとんど全員が一匹狼の「科学屋」になる。もちろん創薬とか電子デバイスとか技術開発はますます大プロジェクトになる傾向にはあるが、プロマネの方としてはその開発段階に応じて適切な技術者に雇い替えをしていくと言う短期雇用制度が中心になるだろう。

企業が生き残るために東芝に反面学習すべきこと、それはドライな雇い替えと終身雇用の廃止である。そして雇われる技術者の方も、「どの分野ならより息長く食えるか」とか「今の分野はもう先がないから若いうちに分野を切り替えておこう」と言った決断が生涯を左右する。

こうなったらお行儀など構ってられない。これからは隣の奴を出し抜いてもしたたかに売り込んで生き残るヤクザな時代の幕開けであり、この「終わった時代の象徴的な幕引き」が東芝に残された最後の任務である。

2017. 08. 22